

長野県松本市

MOTOHARA

元原遺跡

— 発掘調査報告書 —



2007.3

松本市教育委員会

長野県松本市

MOTOHARA

元原遺跡

— 発掘調査報告書 —

2007.3

松本市教育委員会

序

元原遺跡は松本市の北部、桐地区に所在する遺跡です。本遺跡は以前から埋蔵文化財として知られていました。今回当該地に中原土地区画整理事業が計画されたため、松本市が松本市中原土地区画整理組合から委託を受け、埋蔵文化財を記録保存する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は平成17年7月から同年11月にかけて行われました。暑さ厳しい夏から冬の寒さを肌を感じ始める頃にかけての調査となりましたが、関係者の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、奈良時代から平安時代の集落の跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思います。

緊急発掘調査は近年開発事業が増加する中で、遺跡を記録保存する目的で行う調査です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えています。

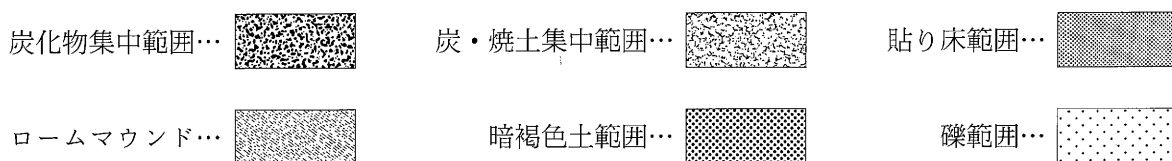
最後になりましたが、発掘調査に多大なご理解とご協力をいただいた松本市中原土地区画整理組合の皆様、及び地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

松本市教育委員会 教育長 伊 藤 光

例 言

- 1 本書は平成17年7月26日～11月25日に実施された、松本市桐2丁目1135番ほかに所在する元原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本市中原土地区画整理組合による土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、3章4節：直井雅尚 2章1節：森 義直 その他を小山貴広が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。
遺物洗浄・注記：百瀬二三子
土器接合：竹平悦子、中澤温子
土器実測、トレース：白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、八板千佳
遺構図調整、トレース：村山牧枝
遺物写真：宮嶋洋一
総括・編集：小山貴広
- 5 本書で略称を用いる場合は以下のとおりに表記している。
第○号住居址→○住、竪穴状遺構→竪○、掘立柱建物址→建○、第○号溝→溝○、
第○号土坑→土○、第○号ピット→P○
- 6 本書では以下のものをスクリーントーンで表した。



- 7 遺構・遺物等の記述で用いた古代の時期区分・用語・分類等は以下の文献に拠った。
(財)長野県埋蔵文化財センター 1990
『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 -松本市内1- 総論編』
- 8 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館
(〒390-0823 長野県松本市大字中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189)に収蔵されている。

目 次

序

例 言

目 次

1 章 調査の経緯

- 1 節 調査に至る経緯 1
- 2 節 調査体制 1

2 章 調査地の環境

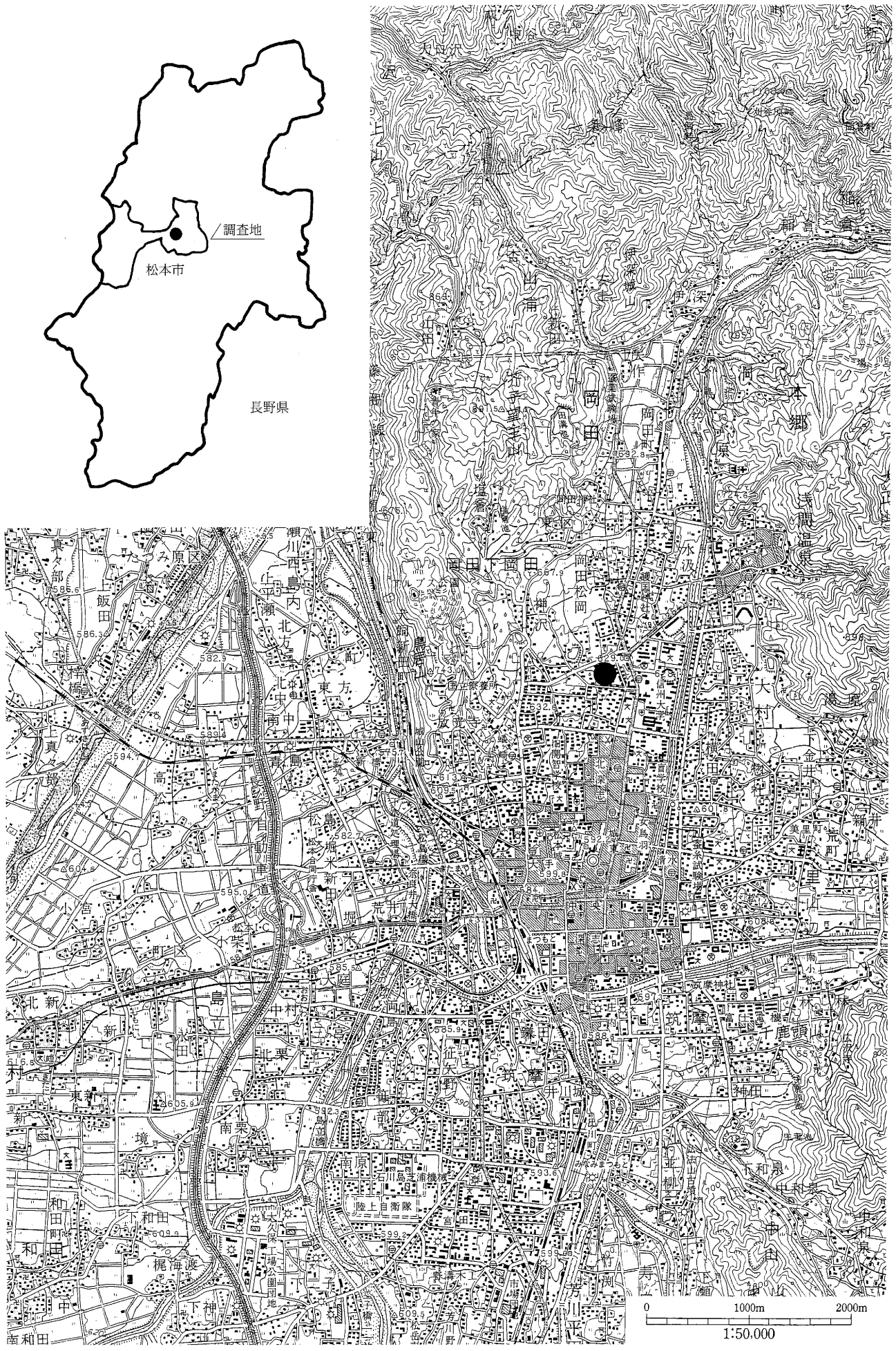
- 1 節 地理的環境 7
- 2 節 歴史的環境 9

3 章 調査結果

- 1 節 調査概要 10
- 2 節 調査成果 10
- 3 節 出土遺構 11
- 4 節 出土遺物 19
- 5 節 調査のまとめ 24

附 編 25

写真図版



第1図 遺跡位置図

1 章 調査の経緯

1 節 調査に至る経緯

今回、長野県松本市桐2丁目1135番他において、松本市中原土地区画整理事業が計画された。事業地の一部は周知の埋蔵文化財包蔵地である元原遺跡に該当しており、道路の設置等により予定地内の埋蔵文化財が破壊される恐れが生じた。そこで松本市教育委員会で試掘確認調査を行ったところ、予定地内の埋蔵文化財は包蔵地近接地も含め良好に残されていることが判明したため、協議のうえ事前に発掘調査を実施して記録による遺跡の保存を図ることとした。発掘調査は平成17年7月1日付で松本市中原土地区画整理組合と松本市長菅谷昭との間で発掘調査委託契約を締結し、松本市教育委員会が行った。次いで発掘調査報告書作成の委託契約を平成18年6月1日付で締結した。

文化財保護法第93条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書は、実施設計後の平成19年1月15日付長野県教育委員会宛てに提出された。

現地での発掘調査は平成17年7月26日～平成17年11月25日にかけて行った。調査終了後、平成17年11月30日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また同日埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成17年12月12日付で長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定を受けた。

出土遺物及び現場測量図・写真等の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行った。

2 節 調査体制

調査団長：竹淵公章（松本市教育長、～平成18年3月）、伊藤 光（同 平成18年4月～）

調査担当者：朝倉一樹（文化財課主任）、小山貴広（同 嘱託）

調査員：今村 克、森 義直

協力者：飯田三男、海老原千津子、大和 禎、勝川順一、久根下三枝子、久保田登子、笹井トキ子、清水陽子、白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、兎川國明、中澤温子、洞沢文江、待井敏夫、蓑島菜奈、三代沢二三恵、三代沢宗俊、村山牧枝、本木修治、百瀬二三子、八板千佳、山崎照友、渡辺順子、宮嶋洋一

事務局：

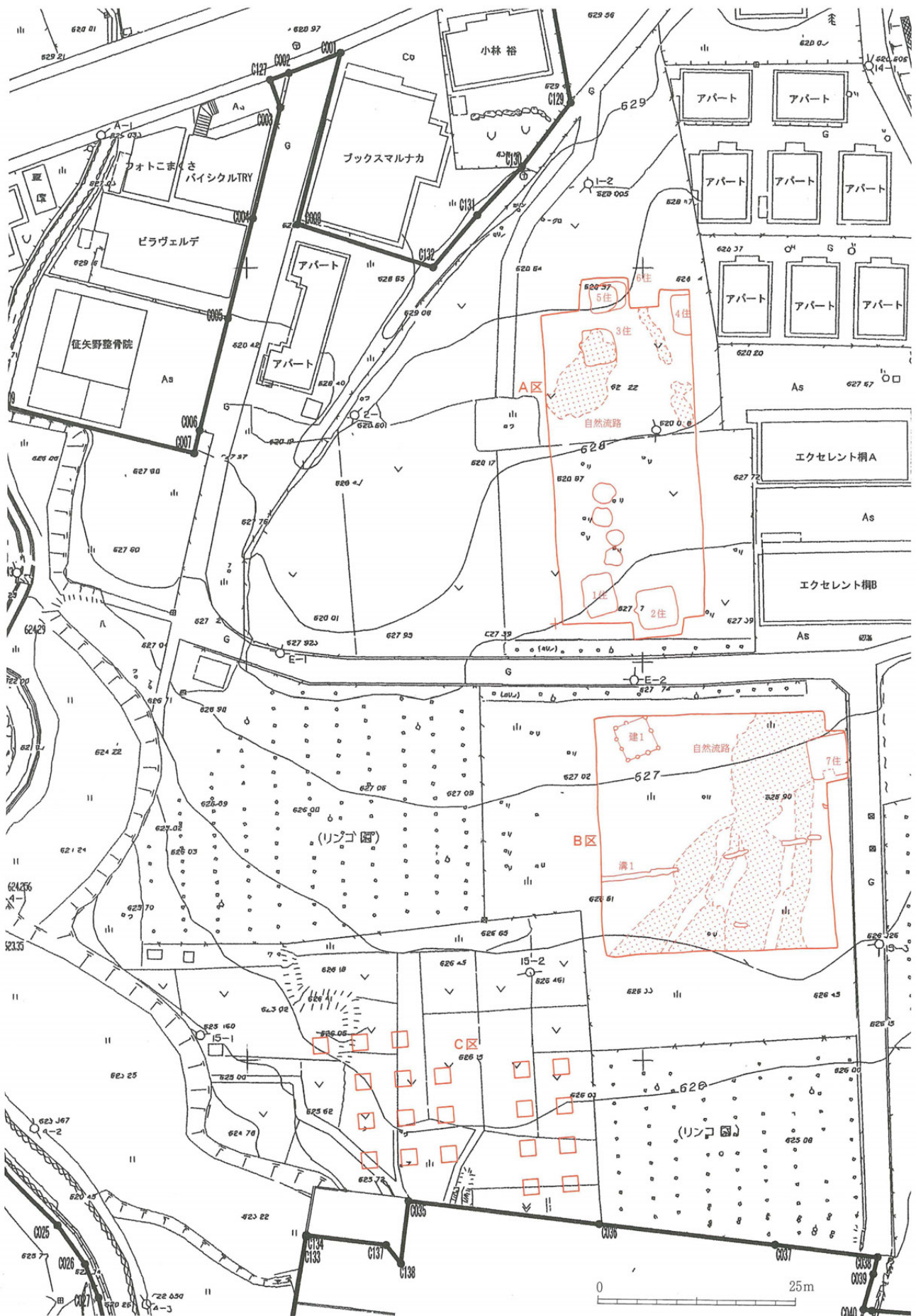
松本市教育委員会 教育部 文化財課

宮島吉秀（課長）、市川恵一（部課長、～平成18年3月）、上嶋乙正（部課長、平成18年4月～）、

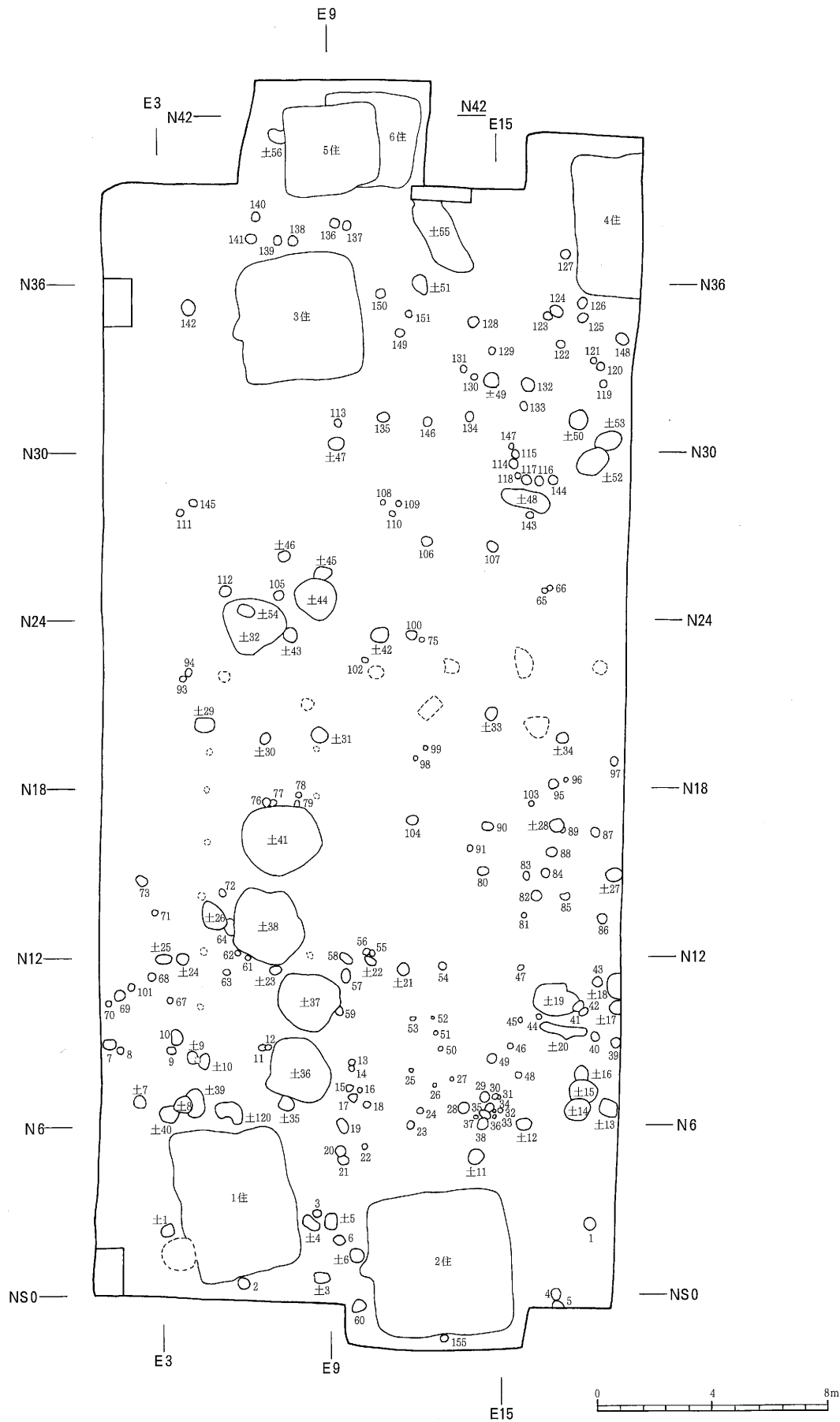
熊谷康治（課長補佐、～平成18年3月）、横山泰基（埋蔵文化財担当係長、平成18年4月～）、

直井雅尚（主査）、関沢 聡（主査、平成18年4月～）、櫻井 了（主事）、

渡邊陽子（嘱託、～平成18年3月）、花村かほり（嘱託）



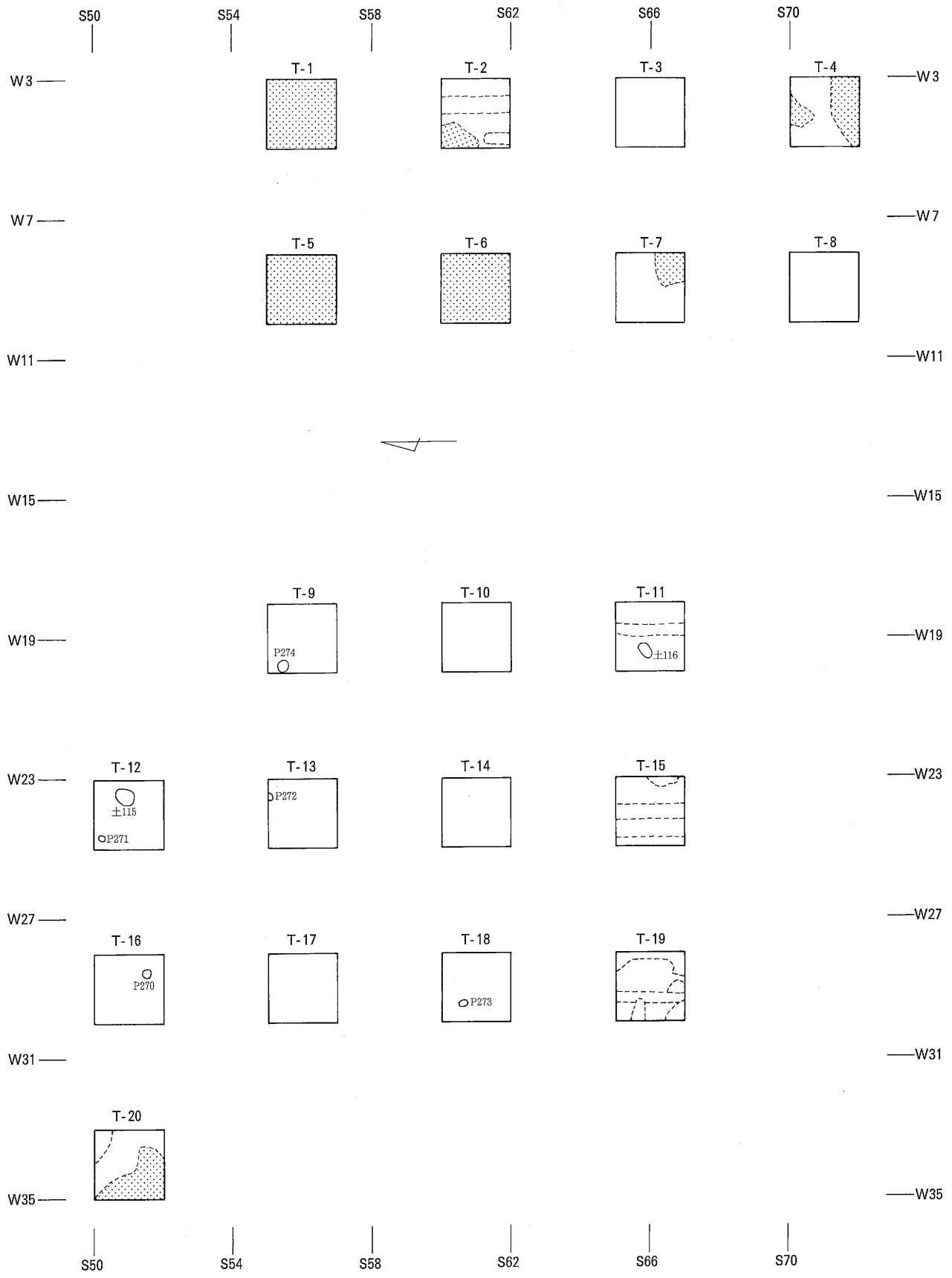
第2図 調査位置図



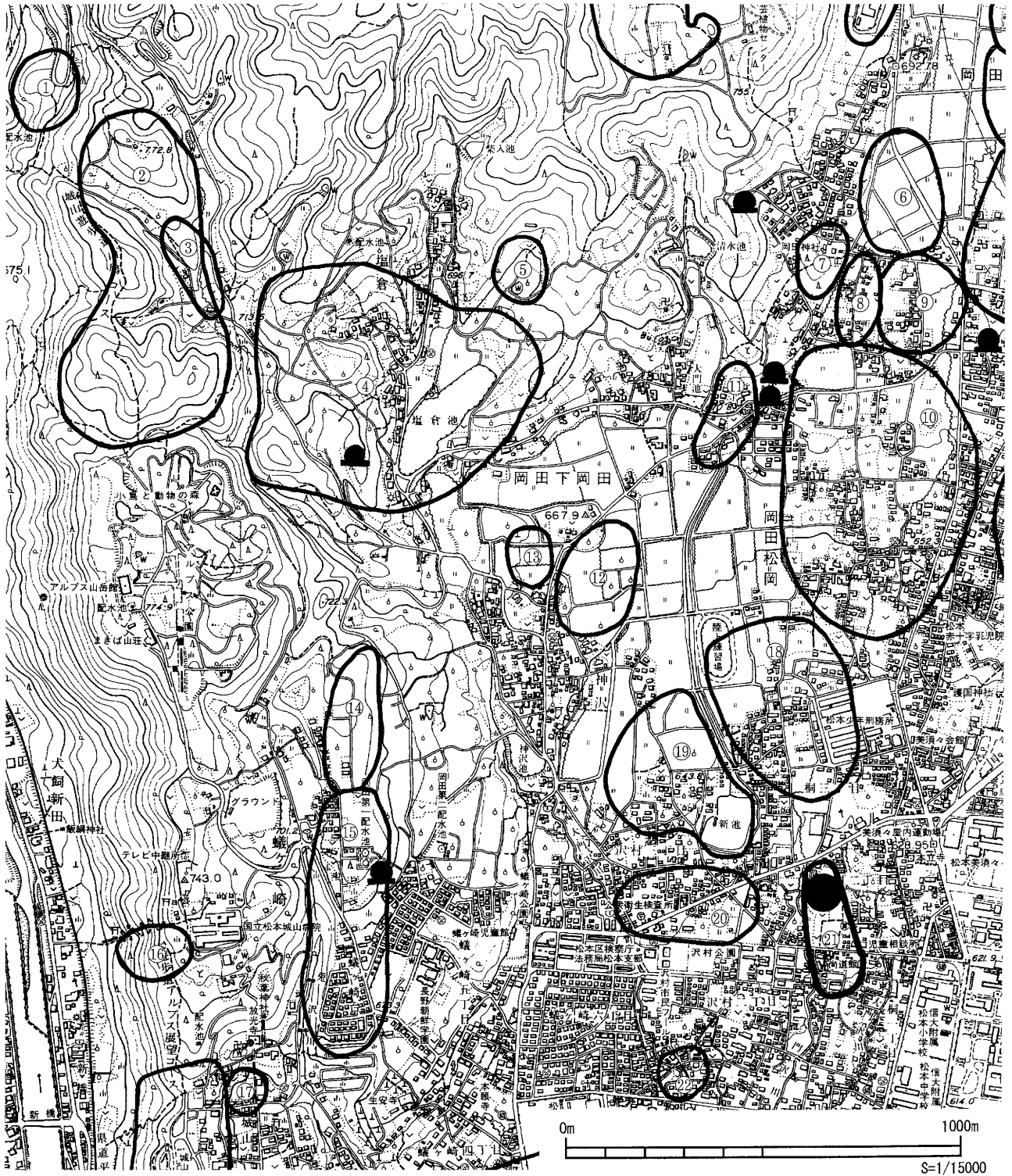
第3図 A区遺構配置図



第4图 B区遺構配置图



第5图 C区遺構配置図



- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1 上ノ寺遺跡 | 11 天神ノ木遺跡 | 21 元原遺跡 |
| 2 御殿山遺跡 | 12 笠原遺跡 | 22 沢村北遺跡 |
| 3 老根田古墳 | 13 土田遺跡 | ●印：今回調査地点 |
| 4 塩倉池遺跡 | 14 神沢遺跡 | |
| 5 御宝殿遺跡 | 15 峰ノ平遺跡 | |
| 6 岡田宮の前遺跡 | 16 鳥居山古墳 | |
| 7 岡田神社裏遺跡 | 17 放光寺遺跡 | |
| 8 岡田堀ノ内遺跡 | 18 トウコン原遺跡 | |
| 9 岡田田中遺跡 | 19 狐塚遺跡 | |
| 10 岡田松岡遺跡 | 20 旧射的場西遺跡 | |

第6図 周辺遺跡図

2章 調査地の環境

1節 地理的環境

地形・地質の概要

本調査地を含む女鳥羽川周辺及び松本市関係の地形・地質の概観については、1993年の松本市二反田遺跡・岡田町遺跡の報告書から2006年の報告書までに、その都度掲載してあるので、そちらを参照されたい。

調査地点付近の立地及び地形・地質について

元原遺跡は岡田地区の南、松本市街地の北部に位置し、南流する女鳥羽川により形成された扇状地の西部にだけある3段の段丘のうち、伊深・岡田・反目・中原に至る第2段丘面が、低湿地（深志湖とも仮称されている）の旧松本市街地に埋没する近くにあり、標高は615m～620mの間にある。

この第2段丘面上を平安前期まで旧女鳥羽川が岡田町の西部を南流し、本発掘地付近より南では平坦な低湿地になるため、流路が東西に振れあるいは分流しながら南流し、最終的には白板付近で田川と合流していたことが今残る地形から推定できる。このように現在と環境を大きく異にするのは、女鳥羽川の流路が岡田町の西側から東側へ移ったためである。

女鳥羽川の流路の移動の原因とその時期について

①扇状地は扇央を中心にして左右に流路の首振りをして貝殻を伏せたような地形となるのが一般的であるが、女鳥羽川扇状地は今後も続く傾動地形のため、西側が隆起を東側が沈降を続けている。したがって縄文以降岡田町の西側を流れていた旧女鳥羽川の流路は次第に隆起して流れにくくなったが、低くなりつつあった岡田町の東側に流れるには桜田～伊深付近で左岸（東側）を侵食して緩やかなカーブになるように侵食作用が働くはずであるが、伊深の左岸（東側）には硬い玢岩が分布しており侵食されにくくなっている。そのため急角度で曲がらなければならず、しかも流速の大きい山からの流れではそれも困難で、既に平安時代の初めには岡田町西部へは流れにくくなっていた。このような状態の中で、②平安前期末とみられる大洪水により多量の土砂が押し出され、流路を始め岡田地区の南部まで厚く堆積し、流路は稲倉付近で一気に東へ首を振り以後現在に至っている。

流路が東へ移ってからの本発掘地点について

旧女鳥羽川が東に移ってからは、細長い西部の山地からの小沢が合して大門沢川となり、発掘地点のすぐ西を流れているが、細長い尾根状の山地では、流域が狭く水量も少ない。したがって水不足を補うため、あちこちに溜池が作られてきた。

この時代になっても地形の傾動は続き、その証拠に大門沢は水量に比し川底を深く浸食しており、谷の深さから推定して年2mm～3mmの割合で土地が隆起し、その分侵食が進んでいるとみられる。したがって大門沢の時代になってからでも2m以上3m近く隆起していることになり、このことがさらに水不足を促進させている。

発掘地点の地形・地質

発掘地点の南方で第2段丘面や扇央の微高地が、低湿地に潜り込むため扇央近くにある本地点は、南側に緩く傾斜しており、堆積物の移動が多くA区では当時の地表面と推定される面より20cm程削られて流出し、その上には北から流れてきた土層（シルト質）が40～50cm堆積している。即ち土層が入れ替わっている。

黄色シルトや黄色砂礫層の地山面より上の土層も地形の傾斜や凹凸の状態により変化があり、A区の一帯北側では1層であるが40m程南では2層に分けられている。B区の発掘面では奈良時代初めの住居址付近

に当時の黒色土層の最下部が削り残されて薄く残っており、その上に色の異なる2層のシルト質の土層が載っている。このA・B地区の地山にはN-60°-E方向からの黄色砂礫層とそこから洗い出された黄色シルト層がモザイク状に分布しており、砂礫層はよく締まっている。

C区は大門沢の左岸で沢によって作られた小段丘状地形の上にある。A～C区共平安時代前期の大洪水により押し出された黒色礫土層は載っておらず、洪水の向きは岡田地区の南端付近で東に変っている。

まとめとして

本発掘地点付近の環境は

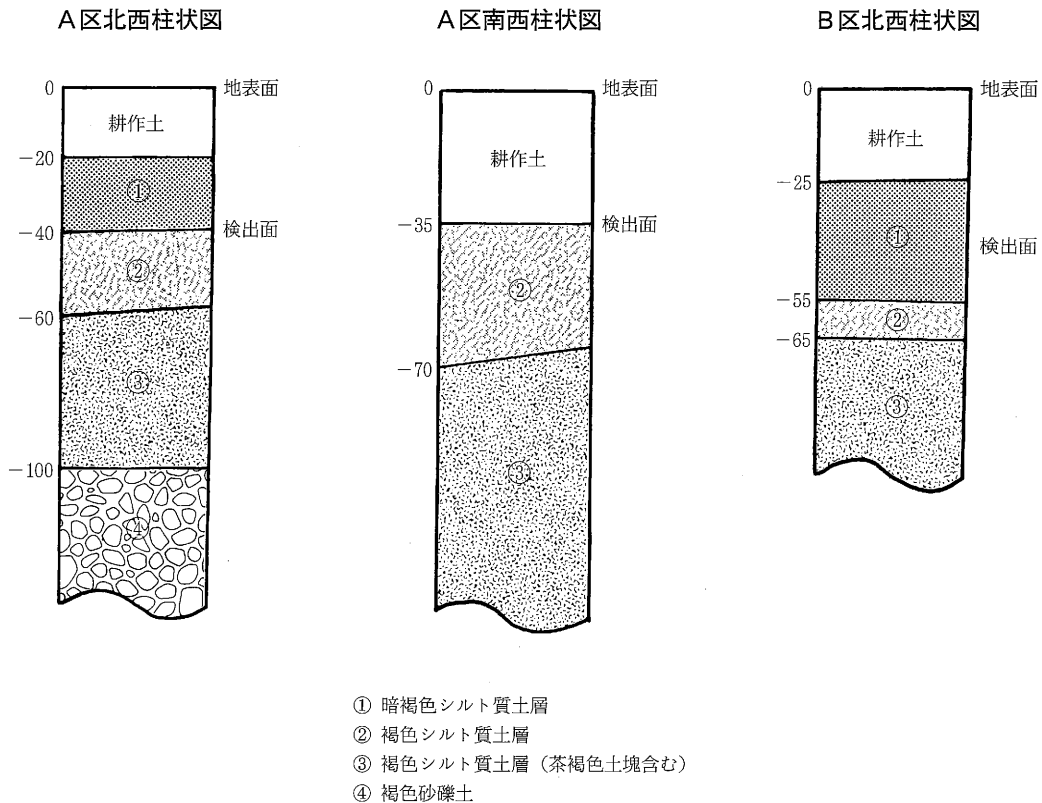
A：縄文時代～平安時代前期までの旧女鳥羽川の時代

B：平安時代中期以降の大門沢・溜池の時代

に大別することができる。

〔注〕

平安時代の大洪水の時期については、発掘の度に平安時代の中で二転三転してきたが、洪水の時期は平成3年の二反田・岡田町の発掘のとき岡田町付近で9Cの住居址を洪水層が厚く覆っていることから9Cの大洪水と推定したが、今日までの調査のまとめとして9C末で決着したことを報告しておく。



挿図1 調査区基本土層図

2節 歴史的環境

元原遺跡は松本市街地の北、桐に位置する遺跡である。桐は女鳥羽川によって形成された扇状地の扇中央部にあたり、岡田地区、城山地区に接する地域である。周辺には岡田地区、城山地区を中心に数多くの遺跡が分布し、古くから人々が生活していたことが窺える。

旧石器時代の遺跡はあまり多くなく、塩倉池、伊深怒田原、岡田神社付近、放光寺などで石器が出土しているが、これらはすべて表採資料であるため詳細については不明である。

縄文時代に入ると中期を中心に遺跡数が増加する。中期の遺跡は丘陵地に広く分布しており、扇頂部に当たる北部山麓では田溝池、矢作、塩辛、岡田町、岡田西裏、岡田松岡などの遺跡がみられる。今回の調査地はこれらの南に位置する城山を中心とした丘陵の東部に位置しており、周囲には神沢、峰の平、狐塚、旧射的場西などの遺跡が広がっている。特に調査地に程近い白金遺跡では前期を中心に中期・晩期の遺物が出土しており、前期では撚糸文土器や下島式土器、晩期では水式土器などが出土している。また、調査地西にあたる旧射的場西遺跡では早期末から前期初頭にかけての土器群や石鏃、滑石製の飾り玉などが発見されている。

弥生時代は城山と、その麓の沢村を中心として遺跡が分布しているようである。城山では城山腰、峰ノ平などで弥生時代の遺構・遺物が見られ、特に城山腰では中・後期の土器とともに太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁、磨製石鏃、石剣、細形管玉が出土している。沢村では沢村、中洲、松本蟻ヶ崎高校などで弥生時代の遺跡がみられる。特に沢村では弥生時代後期の扁平片刃石斧や磨製石戈が出土している。

古墳時代に入ると丘陵地を中心に多くの古墳が築造されるようになる。これらの古墳は女鳥羽川両岸地域、城山地域に集中して築造されている。本調査地が所属し、松本市北西に突出する形となる城山周辺では矢崎、塚山、狐塚、開き松、饅頭塚、勢多賀神社裏、峰ノ平などの古墳が築造されている。特に城山中腹に位置する開き松古墳からは眉庇付冑が出土し注目を集めた。今回の調査地である元原周辺は、これら城山付近に分布している古墳群の中でも一つの小グループを形成しており、一般に水汲古墳群として認識されている。この水汲古墳群の中に元原古墳群があり、旧松本歩兵第五十聯隊の練兵場南隣に古墳があったとされている。この古墳からは勾玉が出土したとされているが記録等が残されておらず詳細は不明である。集落址となると極端に遺跡数が減少してしまうが、旧射的場西遺跡では後期の焼失住居が1軒出土している。4本柱で奥壁中央にカマドがみられ、床面には炭化した垂木材が放射状に残っていた。遺物としては土師器の坏・甕・甑とともに金環が1点出土している。

古墳時代に続いて奈良・平安時代においても岡田地域・城山地域を中心に多数の遺跡が見つかっており、丸山、天神ノ木、松岡、七日市場、狐塚、トゥコン原、城山腰、旧射的場西、などが分布している。中でも城山腰遺跡からは瓦塔の屋蓋隅上部分が出土しているが、出土状態等も不鮮明であり詳細は不明である。さらに城山腰遺跡からは鰐口と磬も出土している。鰐口には「極楽寺長保三年辛丑願主判官代高向朝臣弘信」と陰刻されており、銘文のある鰐口としてはわが国最古のものとして、磬とともに国の重要文化財に指定されている。

調査地付近に目を移してみると周辺には狐塚、トゥコン原、旧射的場西と奈良・平安時代の遺跡が集中している。特に旧射的場西は奈良時代・平安時代ともに出土しており、調査地とも隣接しているため注目すべき遺跡であろうと思われる。

3章 調査結果

1節 調査概要

松本市街地の北部に所在する元原遺跡は扇状地形の扇中央部に位置し、大門沢川と大門沢東川に挟まれた遺跡である。調査地は元原遺跡の北端にあたり、農地が広がる場所であった。今回の調査は当該地に松本市中原土地区画整理事業が計画されたため試掘確認調査を行った。調査ではまず調査範囲を限定するため数箇所でのトレンチによる確認調査を行った。その結果、調査地中央付近に遺構が集中していることが判明したため、これを中心にA区、B区の2地区を設定した。また、南部にも若干の遺構が確認できたためC区を設定し確認調査を行った。C区は遺構数も少なかったため、5mのグリットに沿って2×2mの試掘坑を設定し、範囲確認調査を行った。各調査区の面積はA：802.8㎡、B：888㎡、C：80㎡である。各地区はA区南西に設定した基準点を座標原点（NS0・EW0）として共通の座標を設定し、後に基準点に基準国土座標値（X=28254.493 Y=-47338.594 Z=627.540）を移設した。現場での測量は座標原点を基準に3mのグリットを設定し、それを基準として行った。グリットの座標は真北より西に3°07'00"振られている。測量図は1/20の縮尺で作成した。

発掘調査はまず大型建設機械を使用し、耕作土と基盤土を除去した。次に人力により遺構検出作業を行い遺構の特定を行った。遺構検出が終了し、確定した物から遺構番号を付し掘り下げを行った。遺構の状況や土層断面、遺物の出土状況などの記録は写真と実測図により行った。A～C区調査終了の後、ラジコンヘリコプターにより航空写真を撮影した。航空写真撮影終了後に調査区の埋め戻しを行い、調査を終了した。

2節 調査成果

調査期間：平成17年7月26日～11月25日

調査面積：総面積 1770.8㎡

A区 802.8㎡ B区 888㎡ C区 80㎡

検出遺構：竪穴住居址	7軒
竪穴状遺構	1基
掘立柱建物址	1棟
土坑	117基
ピット	272基
溝	6条

出土遺物：土師器、須恵器、縄文土器、石鏃、こもで石等

3節 出土遺構

今回の調査ではA・B区を中心として7軒の住居址と建物址、溝、多数の土坑・ピットが検出された。ここではこれらの出土した遺構について概観していきたいと思う。

第1号住居址

A区南西で検出された住居である。北部に突出部があり当初住居の一部として調査を行ったが、この突出部はカマドではなく土坑が隣接しているものであることが判明した。そのためこれを別遺構（土120）とし、各々掘り下げを行った。また、覆土中層あたりで若干の硬化が確認できたため範囲確認を行ったが、用途等は不明である。

規模は長軸4.9m×短軸4.2mで方形を呈していた。床面には多数の土坑・ピットがみられたが、明確に柱穴と判断できるものはなかった。カマドは西壁であるが廃絶時に破壊されているようで、火床と思われる焼土面のみ確認できた。出土した遺物から1～3期に帰属するものと思われる。

第2号住居址

A区南東に位置する住居である。住居南部は調査区外に入り込んでいたため、必要量調査区を拡張し調査を行った。西側にカマドを持つ方形の住居で2～3度の建替えが行われたものと思われる。周溝は3本あり、最内の周溝のみ5～10cm程低い位置で出土している。この周溝直上層には貼り床も認められたため、便宜上この周溝に伴う住居を旧2住とした。

2住は5.3m×5.0mの方形を呈する住居である。主軸はE-5°-Sとほぼ東向きの住居である。壁面付近には周溝がみられる。周溝はほぼ同レベル・同方向で2本巡っているため、軸を同じくして拡張又は建替えが行われたと考えられる。カマドは住居西側であると考えられ、赤褐色に変色した火床面がみられる。この住居に伴うと思われる火床面は1面しか確認できなかったため、建替え後もほぼ同位置でカマドが使われていたと考えられる。カマドの構築礫は残されていなかったが、周囲には袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが幾つかみられるため、石組み粘土カマドであると思われる。また、火床面中央には支柱の痕跡も確認できた。覆土は恐らく最外の住居廃絶時のものと思われるが、暗褐色土が堆積していた。内側の周溝は深さ2～10cm程と浅く方形に巡っており、その覆土は2住覆土に切られている。また、この周溝に接するように覆土下層に貼り床がみられた。貼り床は一部東側に広く広がってはいるものの、ほぼ内側周溝内に集中していた。恐らく2住建設時に貼られたものであると思われる。住居の帰属時期は出土遺物から2～3期であると考えられる。

旧2住は4.0m×3.7mの方形を呈しており、2住と主軸を同じくする住居である。壁面と思われる箇所には周溝が巡っている。カマドは2住とほぼ同じ位置であると思われ、旧2住床面から続く火床面が確認された。柱穴は土1～4が該当すると思われる。床面中央やや西よりには南北方向に溝状遺構が確認された。この溝状遺構はやや蛇行した形であり南端で若干窪んでいる。また住居南西隅には楕円状のピットが3基と土坑4から続く溝が1条確認された。周囲には炭・焼土が集中していたが、その用途等は不明である。

旧2住のカマドから出土した炭化物において樹種同定及び年代測定を行ったところ1220±70BPのカエデ属であるとの結果を得ている。この炭化物は火床面直上に分布していたことからカマドの燃料材である可能性が高い。旧2住は覆土のほとんどが2住に切られていたため帰属時期を明確にはしがないが、出土遺物と年代測定の結果から、2住・旧2住はほとんど時期的差異の無い内に建替えられたと考えられる。

第3号住居址

A区北に位置している。洪水層と思われる礫層を切るように検出された。4.5m×4.4mの方形住居で覆土

は暗褐色土であった。床面は礫層が露出しており、貼り床等はみられなかった。住居西側には焼土を伴う突出部がみられた。恐らくカマドの火床面になると思われる。壁面には周溝と思われる溝が廻っている。床面には土坑・ピットが6基みられ、このうちP1～3・P5は柱穴になると思われる。出土遺物から1～2期の住居であると思われる。

第4号住居址

A区北東隅で確認された。住居北部・東部は調査区外であったが、拡張が可能であった住居北部のみ拡張して調査を行った。床面やや北には東西方向に幅10cm程の溝がみられた。溝の先端にはピットが隣接していたことから間仕切りの跡である可能性も考えられる。溝の周辺の床面は若干窪んでおり、溝もこの箇所の一部切れている。周囲にはP4～10がみられるがこれらも窪みの一部である可能性も考えられる。住居北西部には溝に接するようにして20cm大の礫が集中していた。これらの礫はほぼ2箇所にまとまっており、それぞれ向きをそろえて置かれていた。これらの出土状態などからこもで石である可能性が考えられる。出土遺物が少なく帰属時期は判断しがたいが、恐らく11期以降であろうと思われる。

第5号住居址

A区北端に位置する。3.5m×3.3mの方形を呈しており、6住の床面を5cm程度掘り込む形で床面を形成している。遺構上面の大半は削平されており、床面まで10～20cm程度しか残されていなかった。カマドは明確な痕跡がみられず詳細不明ではあるが、東部に焼土が集中した土坑が出土しており、恐らくこれがカマド火床になるであろうと思われる。土坑南部付近では30～40cm大の礫が集中して出土した。恐らくカマドの構築礫をまとめたものであろうと思われる。床面からは17基の土坑・ピットが出土したが、柱穴は不明である。帰属時期は若干新しく、6～7期であると思われる。

第6号住居址

A区北端に位置する。遺構上面のほとんどが削平されているうえ、大半を5住に切られており詳細が判別しがたいが、南北3.3mの方形を呈するであろうと思われる。住居内にはカマド等はみられなかった。1～3期であると思われる。

第7号住居址

B区北東に位置する。長軸5.1mの方形を呈しており、壁直下には周溝が巡っている。住居北側には焼土が集中している箇所がみられた。付近に袖石等はみられなかったが恐らくこれがカマドになるであろう。床面には8基の土坑・ピットがみられる。柱痕が明瞭にみられるものは無かったが、その配置等から土1・3、P4が柱穴であると思われる。

カマドやや南には炭化物と焼土の集中箇所がみられた。炭化物は非常に薄く、布状のものが炭化したように見受けられる。この炭化物の周囲からはこもで石が出土している。こもで石は長さ10cm前後のものが9点、炭化物を囲むように並んでいた。こもで石の一部には炭化物が付着しているものもみられるため、この炭化材はこもで石に伴うものであろうと思われる。また、この炭化物は年代測定を行ったところ1780±90BPのイネ科であるとの結果を得ている。

出土遺物からは2期の住居であると判断される。

掘立柱建物址

B区北西にみられた。3間×3間の掘立柱建物址であると思われる。やや北西向きの建物址で内部に土58がみられる。内部には一部暗褐色土が見られたためサブレンチを入れて確認したが、特に掘り込み等は見られなかった。遺構内からは特に遺物等の出土はなく帰属時期は不明である。

竪穴状遺構

B区南部で検出された。3.3m×2.9mの方形を呈しているが、自然流路の影響からか北東部と南西部が突

出した形となっている。覆土は暗褐色土であるが多数の礫が混入している。南部壁面から東部壁面に渡ってテラス状の平坦面が認められた。遺構に伴う遺物も特に認められず、用途・帰属時期等は不明である。

溝

B区南西から東西方向に伸びる溝である。総延長28mとほぼ調査区を横断する溝であるが、所々自然流路による礫層に切られて分断されている。そのためそれぞれ溝1～4の番号を付して調査を行った。総じて覆土は単層であり、鉄分が混入した暗灰褐色土が堆積していた。覆土中からは水成堆積物等の痕跡はみられず、鉄分の沈殿層も認められなかったため、この溝は流水のないものであったと考えられる。また、底面付近には一部礫がまとまってみられた。礫は10～30cm程度であったが、出土状態から人為的に投げ込まれた可能性も考えられる。遺構中からは時期の判別できる遺物はなく帰属時期は不明である。

土坑・ピット

全域を通して土坑119基、ピット274基が確認された。内土2・112、P74・92は欠番とした。多くは出土遺物もなく、時期・用途等不明である。A区南西（1住付近）には大型の土坑が4基並んでいた（土36・37・38・41）。これらの土坑は総じてローマウンドを形成している。また、B区北西部では建1を中心にピット群が見られる。この付近は洪水の影響も少なく、ピット群の中には直線状に並ぶグループも幾つか見られるため、数軒の掘立柱建物が存在していた可能性も考えられる。

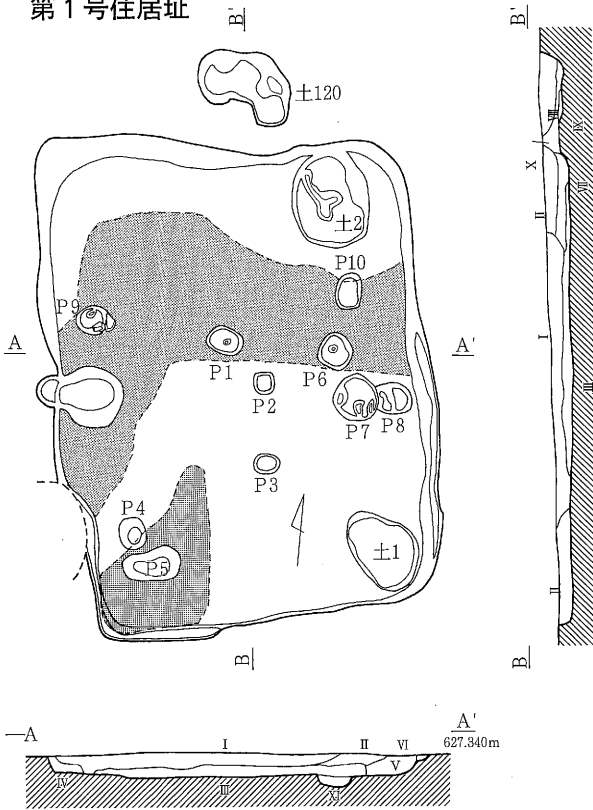
第1表 竪穴住居址一覧表

No.	区	平面形	規模 (cm)				主軸	カマド位置	時期	備考
			長軸	短軸	深さ	床面積 (㎡)				
1	A	方形	499	421	29	17.1	E-9°-S	西壁	1～3期	土120・P2隣接。南西部攪乱。
2	A	方形	537	502	25	19.4	E-5°-S	西壁	2～3期	拡張あり。北東部攪乱。
旧2	A	方形	400	379	40	12.5	E-5°-S	西壁	2～3期	北東部攪乱。
3	A	方形	453	441	15	14.8	E-7°-S	西壁	1～2期	
4	A	方形	510	<241>	19	10.7		不明	11期	東半調査区外。
5	A	方形	350	331	23	9.3	W-12°-N	東壁	6～7期	6住を切る。土56を切る。
6	A	方形	336	(332)	11	9.7		不明	1～3期	6住に切られる。
7	B	方形	514	<500>	18	21.9	N-7°-E	北壁	2期	東部調査区外。南部一部攪乱。

第2表 掘立柱建物址一覧表

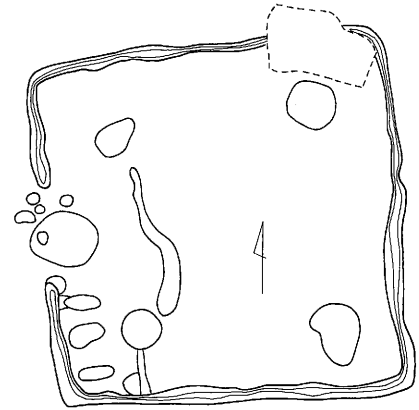
No.	区	平面形 柱配り	主軸方向 面積 (㎡)	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱穴			備考
						平面形	規模 (cm)	柱痕	
1	B	方形	N-19°-E	3間×3間	150～182	円形	径 36～54 深 16～29		土58を内包する。北部攪乱。
		側柱	21.1						

第1号住居址

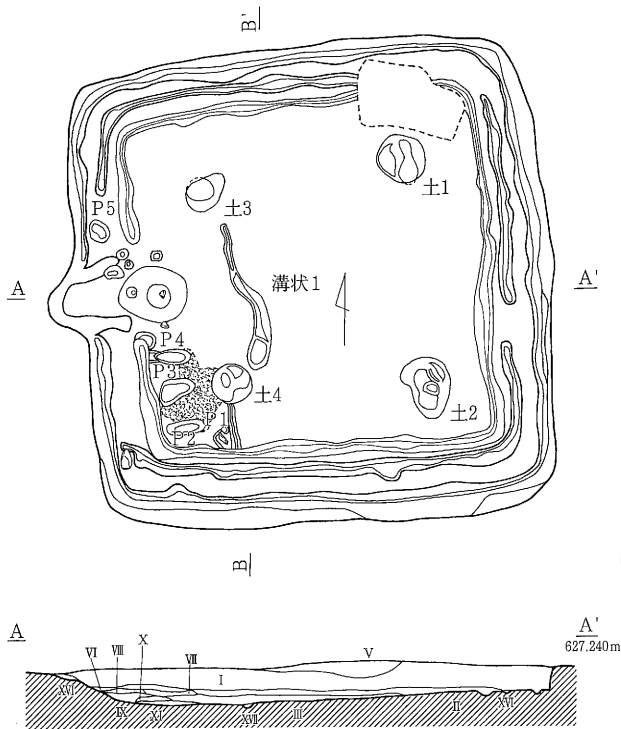


- I: 黑褐色土 (褐色土粒少量、白色石粒微量)
- II: 黑褐色土 (褐色土块少量、 ϕ 1 cm 砾微量)
- III: 黑褐色土 (褐色土块多量、炭·烧土微量)
- IV: 黑褐色土 (褐色土块中量、 ϕ 1 cm 砾少量)
- V: 黑褐色土 (褐色土粒多量、 ϕ 0.5 cm 砾少量)
- VI: 褐色土 (ϕ 1 cm 砾微量)
- VII: 黑褐色土 (褐色土块多量、白色石粒中量、 ϕ 1 cm 砾微量)
- VIII: 黑褐色土 (白色石粒多量)
- IX: 暗褐色土 (灰褐色土粒少量)
- X: 黑褐色土 (褐色土粒多量、烧土粒微量)
- XI: 暗褐色土 (褐色土粒微量)

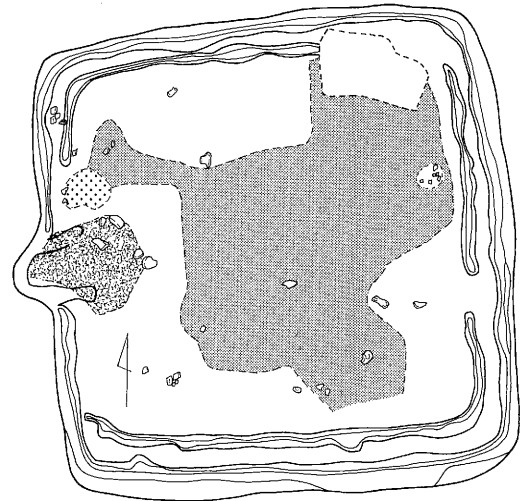
旧2住出土状况



第2号住居址



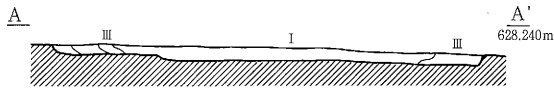
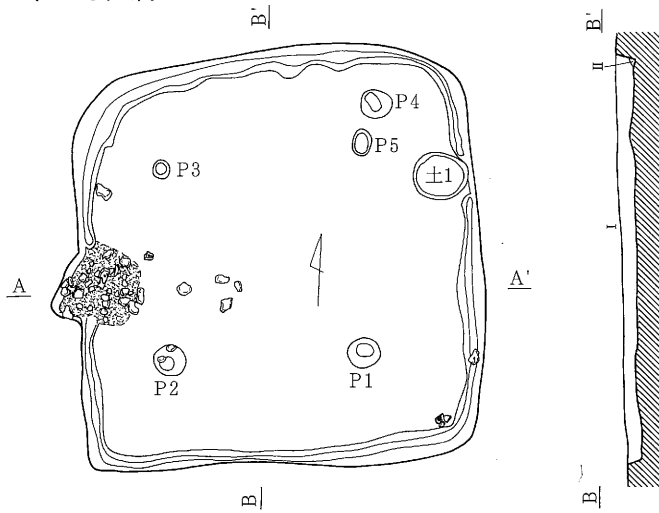
2住出土状况



- I: 暗褐色土 (褐色土块中量、炭·烧土粒微量、白色石粒少量)
- II: 暗褐色土 (褐色土块多量、烧土粒少量)
- III: 暗褐色土 (褐色土粒·烧土粒微量)
- IV: 暗褐色土 (褐色土块中量)
- V: 暗褐色土 (褐色土粒·白色石粒少量)
- VI: 暗褐色土 (褐色土粒·炭化物少量、烧土块中量)
- VII: 暗褐色土 (褐色土粒中量)
- VIII: 暗褐色土 (烧土粒微量)
- IX: 烧土 (暗褐色土粒中量)
- X: 烧土 (暗褐色土粒微量)
- XI: 烧土
- XII: 褐色土 (暗褐色土粒少量)
- XIII: 褐色土 (暗褐色土粒·烧土粒微量)
- XIV: 暗褐色土 (褐色土粒中量、烧土粒少量)
- XV: 暗褐色土 (褐色土粒中量、白色石粒少量)
- XVI: 暗褐色土 (褐色土粒中量)
- XVII: 暗褐色土 (褐色土粒中量、白色石粒少量)

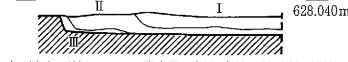
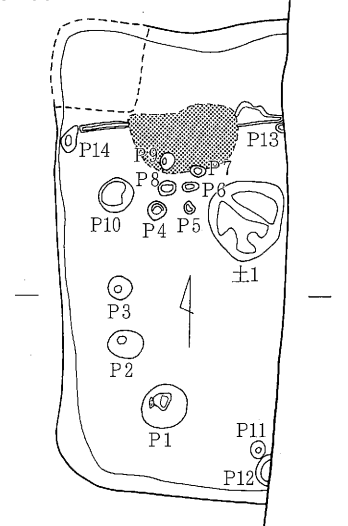
第7图 A区住居址(1)

第3号住居址



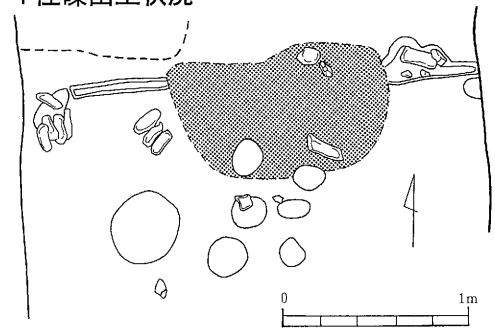
- I: 暗褐色土 (褐色土粒・白色石粒少量、 $\phi 0.5\text{cm} \sim 1\text{cm}$ 礫微量)
- II: 暗褐色土 (褐色土粒・焼土粒微量)
- III: 暗褐色土 (白色石粒微量、褐色石粒少量)

第4号住居址

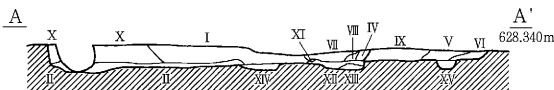
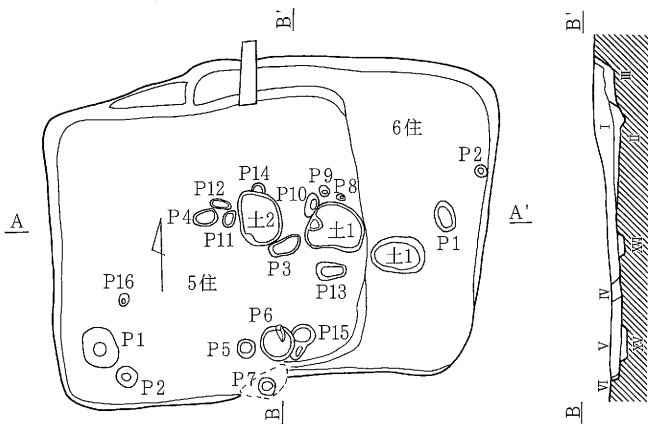


- I: 暗褐色土 (白色石粒・ $\phi 0.5\text{cm}$ 礫少量、褐色土塊・焼土粒微量)
- II: 暗褐色土 (褐色土塊多量、白色石粒・焼土粒微量)
- III: 褐色土 (暗褐色土粒微量)

4住礫出土状況

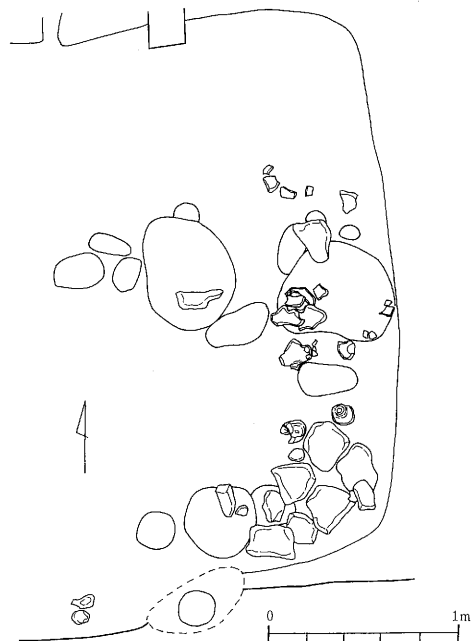


第5・6号住居址

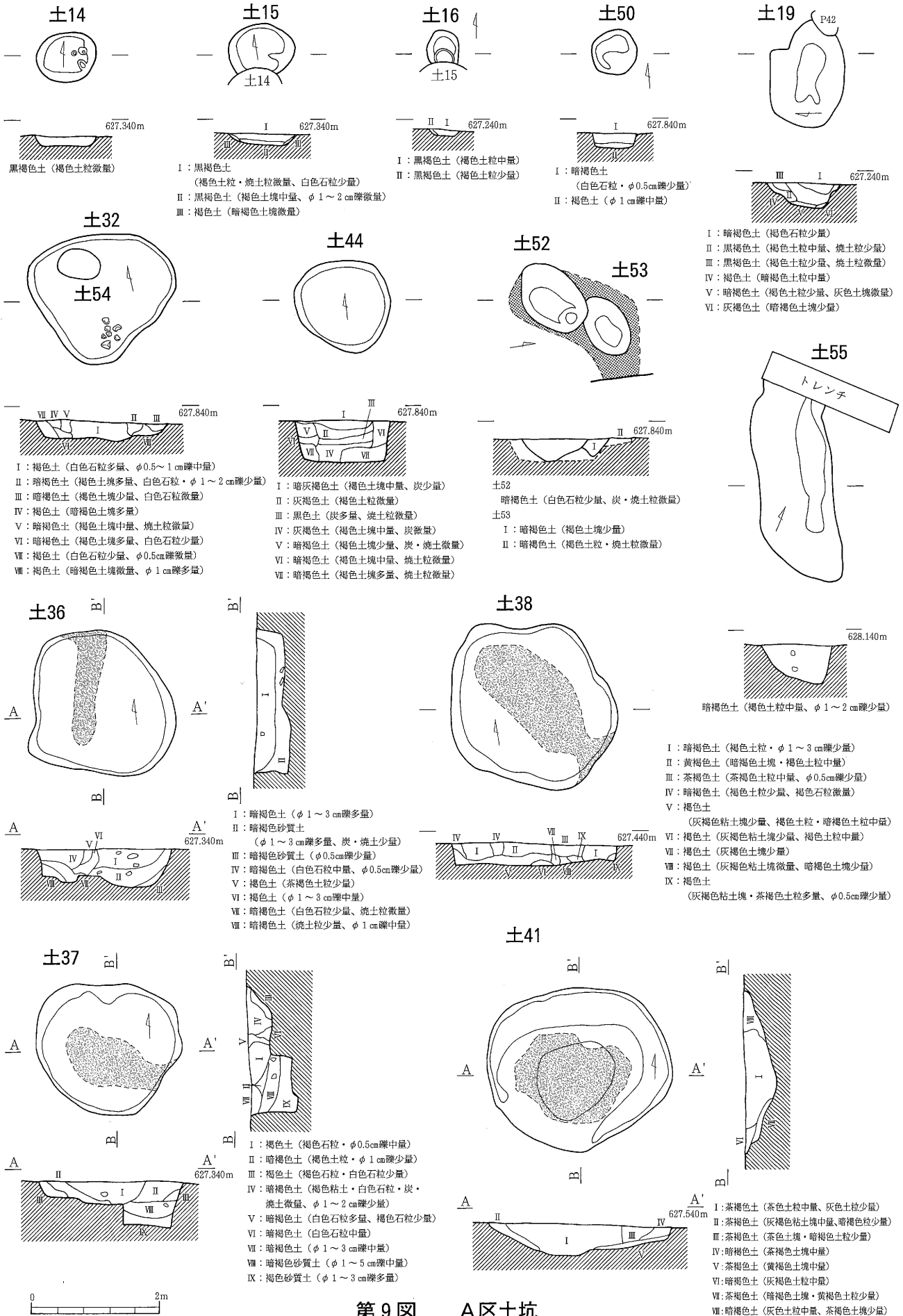


- I: 暗灰褐色土 (褐色土粒少量、焼土粒・白色石粒中量)
- II: 暗褐色土 (褐色土塊中量、白色石粒少量)
- III: 暗褐色土 (褐色土塊多量)
- IV: 暗褐色土 (褐色土塊多量、焼土粒微量、白色石粒少量)
- V: 暗灰褐色土 (褐色土粒少量、焼土粒微量)
- VI: 褐色土 (暗褐色土粒少量)
- VII: 暗灰褐色土 (炭微量、焼土粒中量、褐色土粒少量)
- VIII: 暗灰褐色土 (焼土粒多量、褐色土粒微量)
- IX: 暗褐色土 (炭・焼土粒微量、褐色土粒少量)
- X: 暗褐色土 (褐色土粒中量、白色石粒少量、焼土粒微量)
- XI: 焼土塊
- XII: 暗褐色土 (褐色土粒少量、赤色石粒微量)
- XIII: 褐色土 (暗褐色土粒微量)
- XIV: 暗褐色土 (褐色土粒多量、焼土粒微量)
- XV: 暗褐色土 (褐色土粒中量)
- XVI: 暗褐色土 (褐色土粒少量、赤色石粒微量)
- XVII: 暗褐色土 (褐色土粒少量、焼土粒微量)

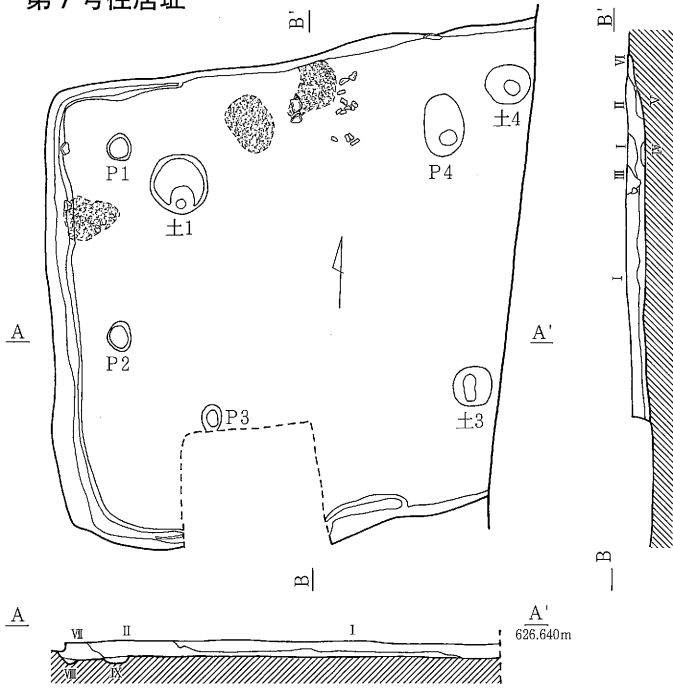
5住礫出土状況



第8图 A区住居址 (2)

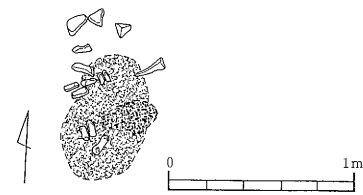


第7号住居址

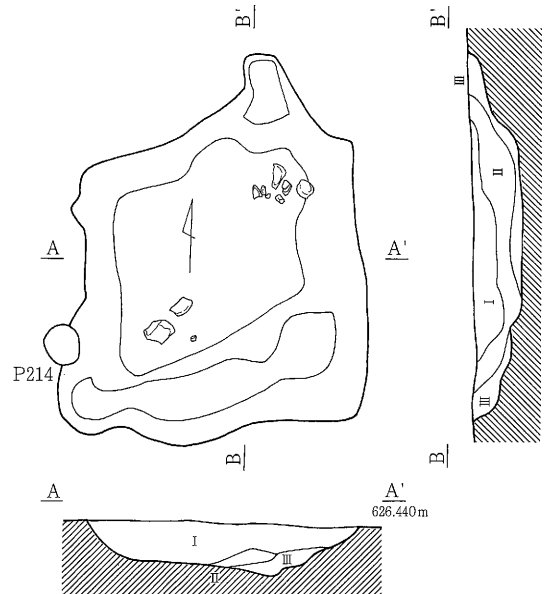


- I : 暗褐色土 (炭・焼土粒・白色石粒少量、褐色石粒中量)
- II : 暗褐色土 (焼土粒微量、褐色土粒・白色石粒中量)
- III : 暗褐色土 (褐色土粒微量、 ϕ 3~4 cm 礫中量)
- IV : 暗褐色土 (焼土粒中量、白色石粒少量、褐色石粒微量)
- V : 暗褐色土 (褐色土粒微量、焼土粒多量)
- VI : 暗褐色土 (焼土粒微量、褐色石粒少量)
- VII : 暗褐色土 (焼土塊微量、白色石粒多量)
- VIII : 暗褐色土 (褐色土塊少量、 ϕ 1~3 cm 礫微量)
- IX : 暗褐色土 (炭微量・白色石粒微量)

7住礫出土状況

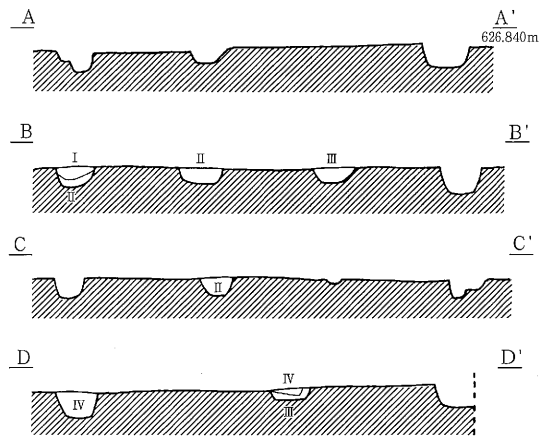
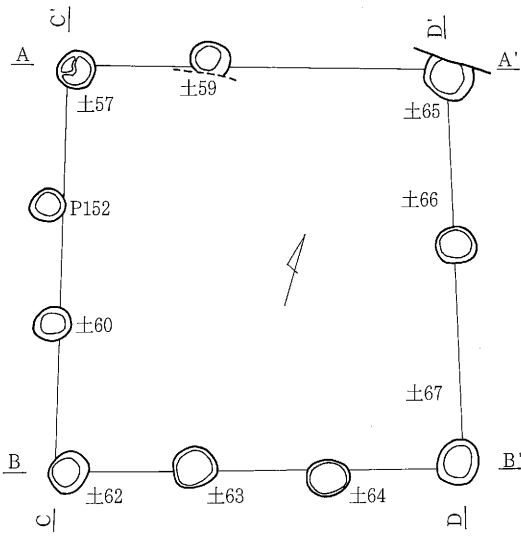


第1号竖穴状遺構

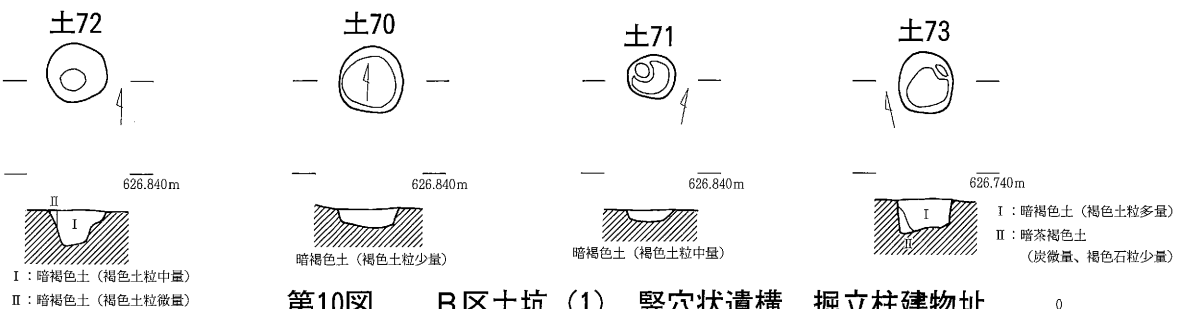


- I : 暗褐色土 (白色石粒少量、 ϕ 0.5cm 礫多量、 ϕ 4~10cm 礫中量)
- II : 暗褐色土 (炭・焼土粒・ ϕ 1~3 cm 礫微量、白色石粒少量)
- III : 暗褐色土 (炭・焼土粒少量、 ϕ 1~5 cm 礫多量)

第1号掘立柱建物址

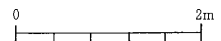


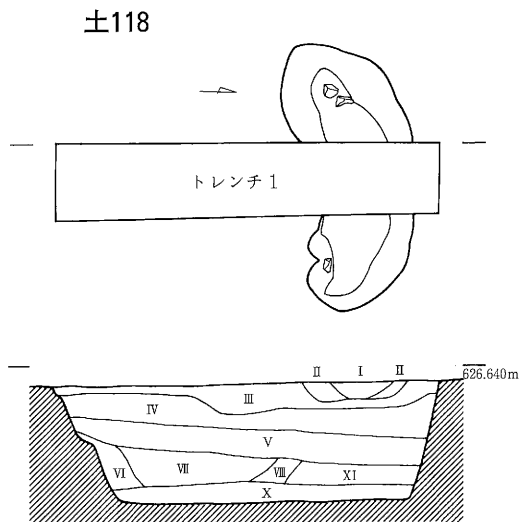
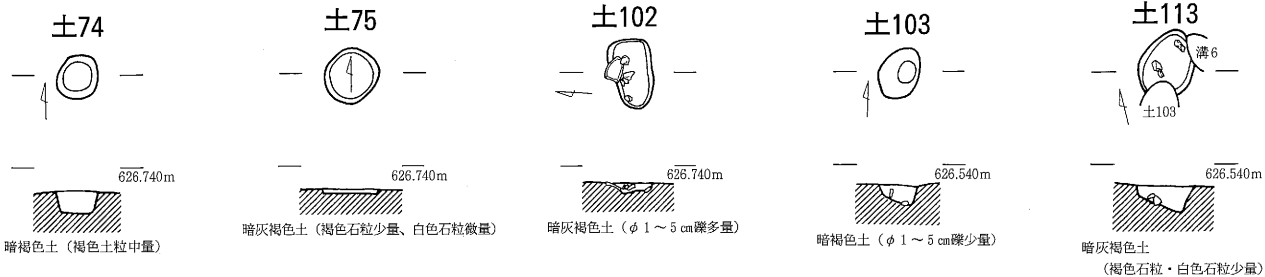
- I : 暗褐色土 (褐色土粒微量)
- II : 暗褐色土 (褐色土粒中量)
- III : 暗褐色土 (褐色土粒多量)
- IV : 暗褐色土 (褐色土粒少量)



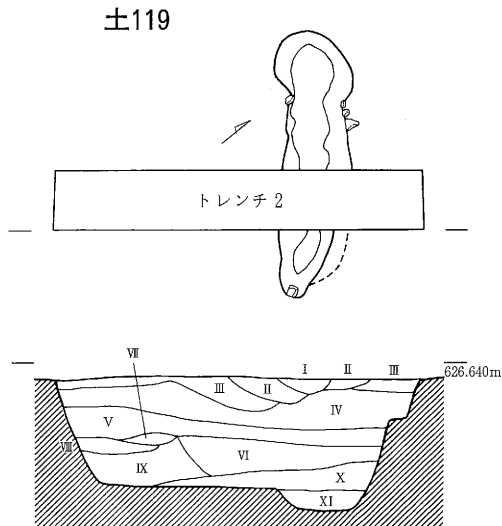
- I : 暗褐色土 (褐色土粒中量)
- II : 暗褐色土 (褐色土粒微量)

第10图 B区土坑(1) 竖穴状遺構 掘立柱建物址

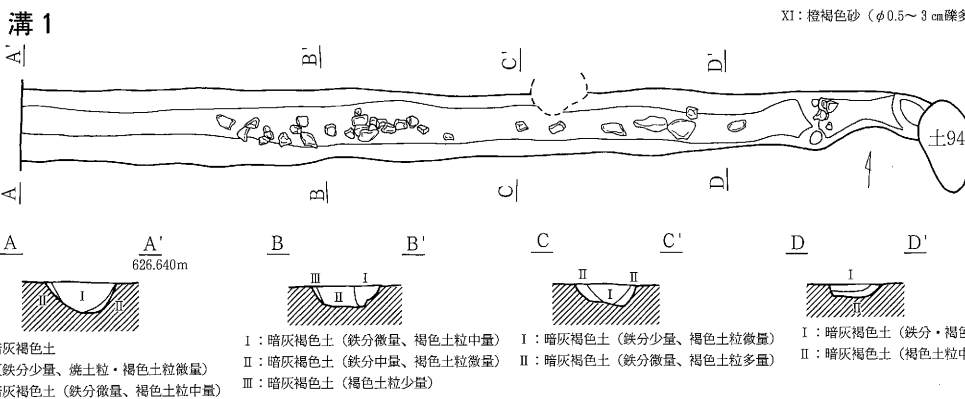




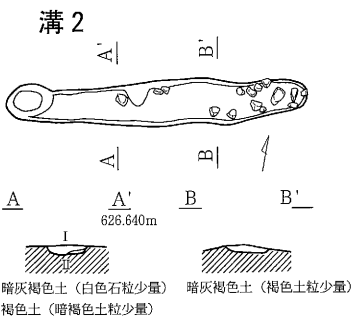
- I : 暗褐色土 (炭・焼土・褐色石粒少量)
- II : 暗灰褐色土 (焼土粒少量、白色石粒中量)
- III : 暗灰褐色粘質土 (褐色石粒少量、φ 1~3 cm 礫中量)
- IV : 褐色砂質土 (暗褐色砂少量、φ 0.5~5 cm 礫中量)
- V : 褐色砂 (暗褐色砂中量、φ 0.5~3 cm 礫中量)
- VI : 暗褐色砂質土 (褐色砂中量、φ 2~5 cm 礫中量)
- VII : 暗褐色粘質土 (褐色砂質土少量、φ 0.5~4 cm 礫中量)
- VIII : 暗茶褐色砂質土 (φ 0.5 cm 礫中量)
- IX : 褐色砂 (φ 1 cm 礫微量)
- X : 暗褐色砂 (φ 1~5 cm 礫中量)



- I : 暗灰褐色土 (焼土粒少量、白色石粒少量)
- II : 暗茶褐色土 (炭微量、褐色石粒微量)
- III : 暗灰褐色粘質土 (褐色石粒少量、φ 1~3 cm 礫中量)
- IV : 褐色砂質土 (暗褐色砂少量、φ 0.5~3 cm 礫中量)
- V : 褐色砂 (暗褐色砂少量、φ 0.5~10 cm 礫中量)
- VI : 褐色砂 (茶褐色砂中量、φ 0.5~10 cm 礫多量)
- VII : 褐色砂
- VIII : 暗褐色石粒 (φ 0.1~0.5 cm 粗砂)
- IX : 暗褐色砂 (φ 5~10 cm 礫多量)
- X : 褐色砂 (黒褐色粘質土中量、φ 1~2 cm 礫中量)
- XI : 橙褐色砂 (φ 0.5~3 cm 礫多量)



- I : 暗灰褐色土 (鉄分少量、焼土粒・褐色土粒微量)
- II : 暗灰褐色土 (鉄分微量、褐色土粒中量)
- III : 暗灰褐色土 (鉄分微量、褐色土粒少量)
- I : 暗灰褐色土 (鉄分少量、褐色土粒微量)
- II : 暗灰褐色土 (鉄分微量、褐色土粒多量)
- I : 暗灰褐色土 (鉄分・褐色土粒微量)
- II : 暗灰褐色土 (褐色土粒中量)



- I : 暗灰褐色土 (白色石粒少量)
- II : 褐色土 (暗褐色土粒少量)

- 暗灰褐色土 (炭・焼土粒微量、鉄分少量、褐色石粒・φ 5 cm 礫少量)
- 暗灰褐色土 (鉄分・褐色石粒少量、φ 0.5 cm 礫少量)

- 暗灰褐色土 (白色石粒少量、焼土粒・φ 1~4 cm 礫微量)

- 暗灰褐色土 (炭・焼土粒微量、白色石粒中量)



第11図 B区土坑 (2) 溝

4節 出土遺物

(1) 縄文土器

大形の破片であるが器面の摩滅が著しく文様・調整等の詳細は不鮮明である。恐らく加曾利EⅡ式の深鉢であると思われる。

(2) 古代の土器

イ 種別・器種

(イ) 土師器

杯、碗、甕、小形甕、羽釜、甌?がみられる。このうち杯、碗、甕、小形甕が図化提示できた。杯・碗類はロクロナデ調整で内面黒色処理のものが多く、底面に糸切り痕を残す。4住と5住を中心に出土した。甕は、外器面調整にハケメが多用される個体(14・30・31・44等)と、工具ナデによる調整が行われる個体(15・17等)の2種に大別される。ハケメが多用される個体は、長胴形を成し、外面のハケメは縦方向に施され、口縁の内面には横のハケメを有す。工具ナデ調整の甕は、図化できたものでは胴張り形と鉢形を呈し形態が一定しないが、他の破片資料を見ると長胴形である。小形甕は主な器面調整が工具ナデによるもの(11・27)、ハケメによるもの(16・28)、カキメによるもの(29・42)の3者がみられる。このうち42は、内外面にカキメをかけながら、胴部外面下部には縦のハケメもいれている。羽釜は小破片で図示し得なかったが4住出土品に混じっていた。同様に高杯も図示不能で、2住出土品に伴う。甌と扱った個体(2)は破片で調整が非常に雑であるが、把手部が欠損した痕跡があり、甌とした。把手付き甕の可能性もある。

(ロ) 須恵器

杯、蓋、甕、瓶類がみられる。杯は無台の杯Aと有台の杯Bの2種がある。杯Aは底面にヘラ切り未調整またはケズリを持つ群と、回転糸切りを持つ群に分かれる。前者は2住出土品や7住出土品が、後者には5住出土品が相当し、前者が後者に先行するものとする。蓋は多くを図示できなかったが、いずれも頂部に宝珠つまみが付される、杯Bとセットになるものである。ただし、2住出土の9は端部が立ち上がる形態をとり、短頸壺類の蓋と想定する。甕は、頸部がきつい稜をなして括れ、そこから長い口縁部が伸びて外開する形態(26・40)と、やや短めの口縁部に頸部の稜も緩めな形態(38・39)、短い口縁部に頸部がわずかに括れ、最大径が口縁短部にある形態(10・41)の3種に分けられる。土坑64からの甕は、外形は土師器の甕に酷似する珍しいものである。瓶類は図化不能の小片で平瓶の口縁部と推測されるのがみられる。

ロ 土器群

まとめて土器が出土した住居址があり、それらをセットとして捉えてみたい。

(イ) 2住出土土器群

須恵器杯A、杯B、壺蓋、甕、土師器甕、小形甕が出土している。量的に杯Bの方が少ない。杯Aはいずれも回転ヘラ切りが行われるもので、切りっぱなしのもの他、切り離し部を手持ちケズリするものがある。土師器小形甕は工具ナデされ、カキメが現れる以前の形態をとる。土師器甕は口縁部の外反が強く、口縁内側にハケメが成される。これらの様相から中央道長野線編年の2期から3期、8世紀の前半に位置づく資料であろう。

(ロ) 5住出土土器群

須恵器杯A、杯B、甕、土師器杯、碗、甕、小形甕が出土している。須恵器杯Bはわずかである。須恵

器杯Aはいずれも回転糸切りで、体部は薄く作られている。土師器碗が存在する。土師器小形甕は、27・28は工具ナデやハケメで異質だが、29には胴部外面にカキメがあり時期的に整合する。土師器甕は長胴形で胴部外面に縦のハケメ、内面に特徴的な縦のナデが入り、口縁部内面のカキメも典型的である。これらの様相は中央道長野線編年に照らして、6期から7期、9世紀の中頃に年代を求められる。調査時の所見から、6住がその大半を本址に切られていたが、27・28の小形甕、須恵器杯Bの23などは、本址の年代より古く、6住出土品が混入した可能性が考えられる。

(ハ) 7住出土土器群

須恵器杯A、杯B、蓋、甕、土師器甕、小形甕が出土している。杯のほとんどは杯Aで、底部はすべて回転ヘラ切りになっている。蓋は杯Bに組み合わさるもので、杯Bも少量、出土している。土師器甕は、外面にハケメを持ったものの他に、図示できなかったが、ハケメのない個体も目立った。小形甕はカキメのもの(42)とハケメや工具ナデのカキメのないものの差異が目立ったが、詳細に見ればカキメの42は異質で、内面にカキメを持ち、外面にカキメとハケメを併せ持つ特殊な構成をしており、単体で見れば、第7号住居址出土品の様相よりもあたらしい感じを受ける。層的な乱れがなければ、5期に定型化するカキメの小形甕の先駆を成すものと理解したい。7住出土品全体の様相は、中央道長野線編年の2期に相当しよう。

(ニ) その他の住居址出土土器群

1住出土品は3点を提示できたのみだが、底面回転ケズリの杯B、ハケメの小形甕、図化できなかったハケメのない甕片などを考慮に入れると、2期前後の様相と推定する。

3住出土品は3点の土師器甕と小形甕のみの図化であるが、甕がハケメを持たない点、だいぶ古そうに見える。1期に近い様相と考える。

4住出土品は全体的に少数で、図化不能品に1・2期の遺物を含む。しかし、図示した土師器の杯には黒色処理がなく、未図化ではあるが羽釜を伴う点から考えると、11期以降の年代も考えられる。ここでは後者で理解したい。

6住出土品は図化提示できたものがない。5住出土土器群の項で触れたが、その中の古い様相を持つものが、本址出土品に相当する可能性がある。

ハ 出土土器群のまとめ

古代においては全体的に古く、中央道長野線編年で1期から3期ころまでを占める土器群が大半であった。1・2・3・6・7の各住居址出土土器群がそれにあたる。7世紀の末から8世紀の前半である。これに対して、5住出土土器群は明らかに新しく、6期から7期の典型的な資料と言ってよいだろう。最後の4住出土土器群は、本来あるべき遺物は非常に少ないが、先に述べたとおり、11期以降、10世紀後半代と考えている。全体的に土師器と須恵器による構成で、灰釉陶器を持たない点は、時期的なことを考慮した上でも珍しいであろう。

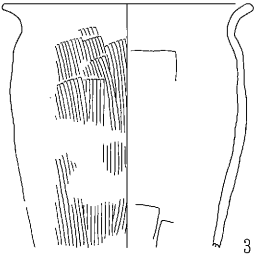
元原遺跡出土土器群は3期に大別され、その第Ⅰ期が1期から3期、第Ⅱ期が6期から7期、最後の第Ⅲ期が10世紀後半代～11世紀以降とすることができよう。その第Ⅰ期に集落の中心があり、第Ⅱ・Ⅲ期は集落縁辺部だったと推定する。

第3表 出土土器一覧表

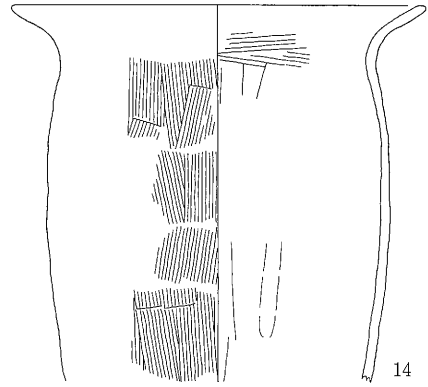
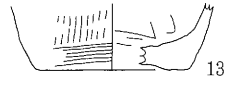
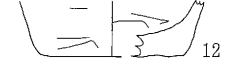
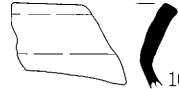
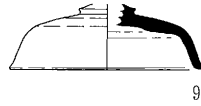
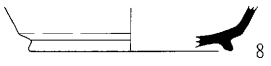
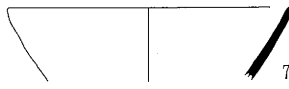
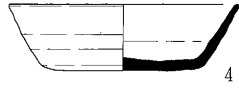
No.	地点	種別	器種	寸法			残存度	紋様・調整		実測番号	注記
				口径	底径	器高		外面	内面		
1	1住	須恵器	杯	13.6	10.8	4.1	一部	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	1住1	1住北東部・北西部・排土
2	1住	土師器	甗?	11.6			一部	ヨコナデ、把手欠損、雑な工具ナデ	雑な工具ナデ	1住2	1住北東部
3	1住	土師器	甗	14			3/4	ヨコナデ、縦ハケメ	縦の工具ナデ	1住3	1住No.1、カマド
4	2住	須恵器	杯	12.8	9	3.7	1/4	ロクロナデ、回転ヘラ切りのち手持ちケズリ	ロクロナデ	2住1	2住北東部
5	2住	須恵器	杯	13.6	8.2	3.7	1/3	ロクロナデ、回転ヘラ切り	ロクロナデ	2住2	2住拡張南東部
6	2住	須恵器	杯	14.2	7.1	4.5	1/2	ロクロナデ、回転ヘラ切りのち手持ちケズリ	ロクロナデ	2住7	2住No.9
7	2住	須恵器	杯	15.8				ロクロナデ	ロクロナデ	2住5	2住北東部
8	2住	須恵器	杯		11.4		1/4	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	2住3	2住北西部
9	2住	須恵器	蓋	10.8			1/5	ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	2住4	2住北東部
10	2住	須恵器	甗					ロクロナデ、ヨコナデ	ロクロナデ	2住6	2住西ベルト
11	2住	土師器	小形甗	13.3			一部	ヨコナデ、工具ナデ	ヨコナデ、工具ナデ	2住8	2住北東部
12	2住	土師器	甗		8.1		1/3	工具ナデ、ナデ	工具ナデ	2住9	2住拡張トレンチ
13	2住	土師器	甗		8.4		1/3	ハケメ、工具ナデ	工具ナデ	2住10	2住西ベルト
14	2住	土師器	甗	23			1/2	ヨコナデ、縦ハケメ	横ハケメ、工具ナデ、縦のナデ	2住11	北西部、北東部、南西部、南東部、西ベルト、No.1・2・7
15	3住	土師器	甗	29			1/16	ヨコナデ、工具ナデ	ヨコナデ、工具ナデ	3住2	3住No.3
16	3住	土師器	小形甗		6.6		底完	横ハケメ、底面木葉圧痕	工具ナデ	3住3	3住No.7
17	3住	土師器	甗	26			口一部	ヨコナデ、工具ナデ	工具ナデ	3住1	3住No.1・4・6・西焼土内
18	4住	土師器	杯	13.4				ロクロナデ	ロクロナデ	4住1	4住No.3
19	5住	須恵器	杯	13.4			1/6	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ	5住3	5住北東部
20	5住	須恵器	杯	12.8			3/8	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ	5住2	5住No.3・12、北東部、ベルト
21	5住	須恵器	杯	13.4			7/8	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ	5住6	5住No.1、南東部
22	5住	須恵器	杯	12.6			口一部	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ	5住3	5住ベルト
23	5住	須恵器	杯	16.4			1/10	ロクロナデ、付け高台	ロクロナデ	5住5	5住南東部
24	5住	土師器	杯	13.2			1/4	ロクロナデ	ミガキのち黒色処理	5住7	5住No.12
25	5住	土師器	椀	16.6			1/4	ロクロナデ、回転糸切り、付け高台	ミガキのち黒色処理	5住8	5住No.4
26	5住	須恵器	甗	25.8			1/6	ロクロナデ、ハケメ	ロクロナデ	5住1	5住No.13、ベルト
27	5住	土師器	小形甗	12			1/7	ヨコナデ、工具ナデ	工具ナデ	5住9	5住No.11
28	5住	土師器	小形甗	13.8			1/6	ヨコナデ、縦ハケメ	工具ナデ	5住12	5住No.11
29	5住	土師器	小形甗		6.4		底完	カキメ、回転糸切り	ロクロナデ	5住13	5住No.2
30	5住	土師器	甗	21.2	9.2	33.2	1/8	ヨコナデ、縦ハケメ	口縁カキメ、胴部縦の長いナデのち工具ナデ	5住14	5住No.5・6
31	5住	土師器	甗	23.2			1/8	ヨコナデ、縦ハケメ	口縁カキメ、工具ナデ	5住10	5住No.1、南東部
32	5住	土師器	甗	21.4			1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	5住11	5住北東部
33	7住	須恵器	杯	14			1/3	ロクロナデ、回転ヘラ切りのちナデ?	ロクロナデ	7住8	7住No.12、北西部、北ベルト
34	7住	須恵器	杯	13.4			3/8	ロクロナデ、回転ヘラ切りのち板状工具ナデ	ロクロナデ	7住5	7住南東部
35	7住	須恵器	杯	13.6			5/12	ロクロナデ、回転ヘラ切り	ロクロナデ	7住7	7住北西部
36	7住	須恵器	杯	15			3/8	ロクロナデ、回転ヘラ切り、高台剥離	ロクロナデ	7住4	7住No.11、北東部、北西焼土内
37	7住	須恵器	蓋	15.8		3.3	3/8	ロクロナデ、回転ヘラ切り、ツマミ貼付	ロクロナデ	7住6	7住南東部、7住上の検出面
38	7住	須恵器	甗	20			1/3	ヨコナデ、タタキ	ヨコナデ、ナデ	7住1	7住No.2、北東部、7住上の検出面
39	7住	須恵器	甗	22			1/5	ヨコナデ、タタキ	ヨコナデ、当て具痕擦り消し	7住2	7住No.3・14、北東部
40	7住	須恵器	甗	26.8			1/2	ヨコナデ、ロクロナデ	ロクロナデ	7住9	7住No.10、北東部、北西部、7住上の検出面
41	7住	須恵器	甗	32.2			1/7	ヨコナデ、タタキ	ヨコナデ、当て具痕擦り消し	7住3	7住No.8・9・11、7住上の検出面
42	7住	土師器	小形甗	12.2			1/4	ヨコナデ、カキメのち縦ハケメ	カキメ	7住10	7住No.6
43	7住	土師器	小形甗	15			1/4	ヨコナデ、ハケメ摩滅	工具ナデ	7住11	7住北西焼土内
44	7住	土師器	甗		8		2/3	縦ハケメ、底面何らかの圧痕	工具ナデ	7住12	7住北東部、北ベルト
45	±64	須恵器	甗	23			1/10	ロクロナデ	ロクロナデ	±64-1	±64-051014
46	G16	縄文	深鉢					沈線による渦巻き紋他	ナデ	Gt-1	T16No.1、グリッド16

A区

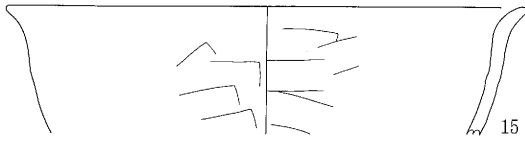
1住 (1~3)



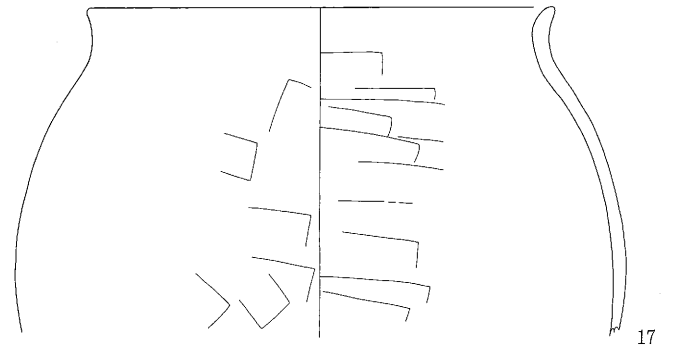
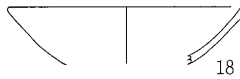
2住 (4~14)



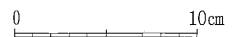
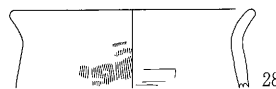
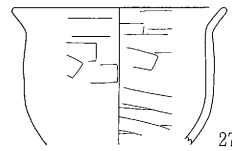
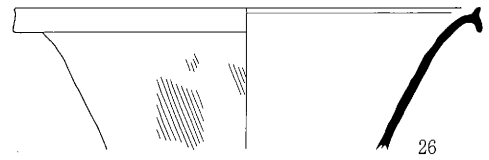
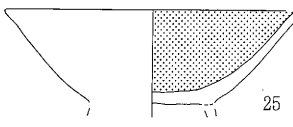
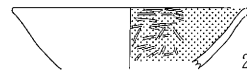
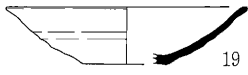
3住 (15~17)



4住 (18)

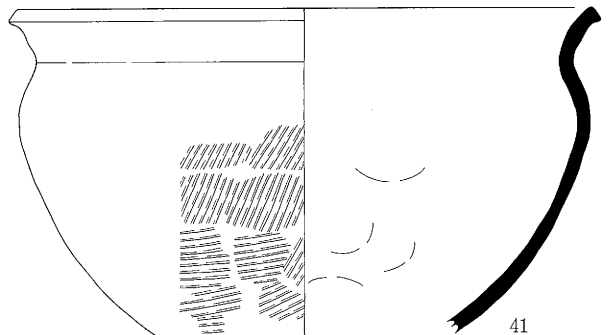
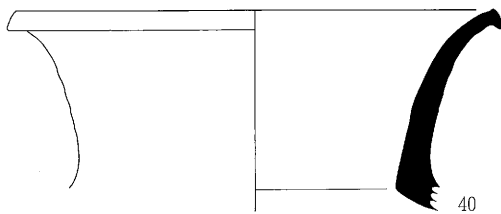
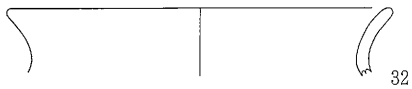
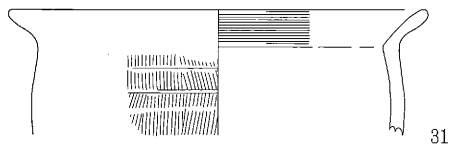
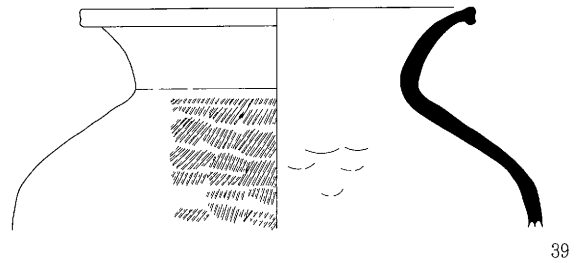
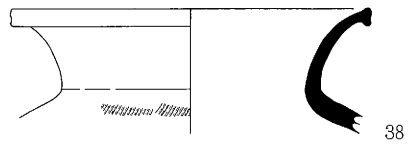
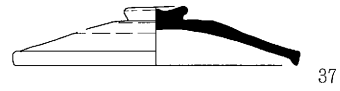
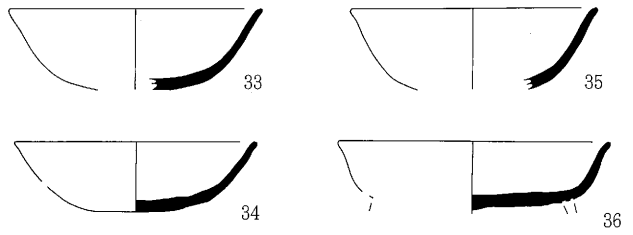
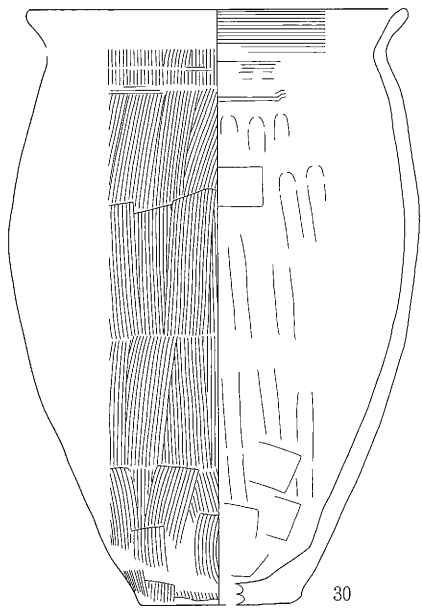


5住 (19~32)

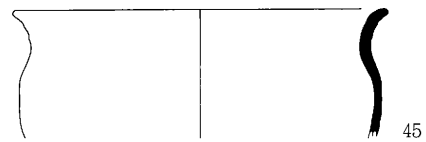
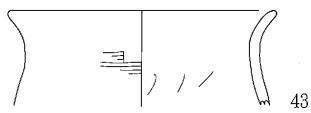
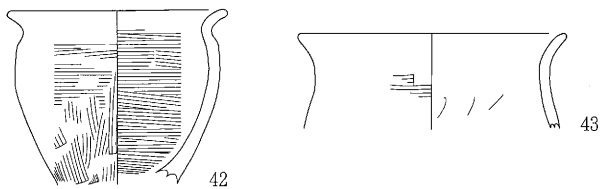


第12図 出土土器 (1)

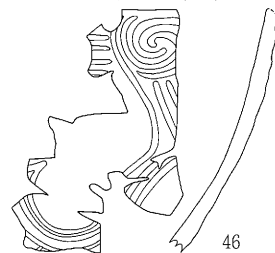
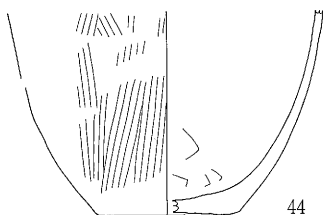
B区
7住 (33~44)



土坑64 (45)



C区
グリット (46)



第13図 出土土器 (2)

5節 調査のまとめ

元原遺跡は西に大門沢川を有し、南に下る傾斜地に位置する遺跡である。周囲には弥生時代から古代にかけて多くの遺跡が分布し、各々発掘調査を重ね貴重な発見がなされている。そのような中、今回の調査は元原遺跡としては初めての発掘調査となる。

調査では古墳時代～奈良・平安時代を中心とした遺構・遺物が出土した。調査区南側に下る緩やかな傾斜地の北側を中心として調査区ほぼ全域に遺構が分布していた。全体的に遺物の量が少なく、明確には判断しがたいものもあるが、遺構の帰属時期は大別して3時期に分かれるものと思われる。以下このそれぞれの時期について概観していきたいと思う。

第Ⅰ期：中央道長野線編年1～3期（7C末～8C初）

今回の調査の中心となる時期である。1・2・3・6・7住がこれに該当する。これら5軒の住居は軸方向もほぼ揃っており、1・2・3住においては西側にカマドを持つ点で一致している。分布は調査地北部・中央付近に集中しており、両者の間にはピット群が見られる。また、1住付近にはロームマウンドを持つ土坑が集中しており、これらを含めた集落の一端を見ることができる。

この時期の集落は西にほぼ隣接する旧射的場西遺跡にもみられる。旧射的場西遺跡との間には大門沢川が流れているため一連の集落とは言い難いが、過去に行った発掘調査の所見では旧射的場西遺跡の集落は東西に広がる可能性があるため、広い範囲での集落の存在を考える上で重要な資料となりえるであろう。

第Ⅱ期：中央道長野線編年6～7期（9C前～9C後）

当時期は遺構数も極端に少なく、該当する住居は5住のみである。住居方向は第Ⅰ期のものとほぼ同じであるが、カマドを東側に持つなど多少異なる様相を見せている。調査地北端に位置する5住以外この時期に該当する遺構がほぼ見られないため調査地北に形成された集落の縁辺部であろうと思われる。

第Ⅲ期：中央道長野線編年11期以降（10C後～11C）

この時期も属する遺構はほとんどなく、4住のみが該当する。4住は西半のみの出土であるうえ遺物数が少ないため当時期の詳細は不明である。

このように本調査地は第Ⅰ期（7C末～8C前）を中心として集落が形成されていたと考えられる。先にも述べたように隣接する旧射的場西遺跡との関連を考慮した集落構造を考える上で貴重な資料を得ることができたと考えられる。また、当該地区は北に岡田地区、西に城山地区を存する地区であるため、これら地域との関わりもこれからの検討課題となるであろう。

はじめに

松本盆地南東部に位置する元原遺跡では、奈良時代から平安時代頃とされる竪穴住居跡や土坑などの遺構、土師器や須恵器などの遺物が確認されており、集落跡があったとされている。今回の分析調査では、竪穴住居跡のカマドおよびカマド付近の焼土より出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行うことにより、遺構および集落に関わる年代資料を作成する。また、年代測定に用いた炭化材は、その出土状況から、燃料材などの目的で用いられ炭化したと考えられることから、その樹種の同定を行い、当時の木材利用等について考察する。

1. 試料

試料は、2住から出土した炭化材（サンプル1）と7住から出土した炭化材（サンプル2）の2点である。ただし、サンプル1には、破片状のものと小枝状のもの2片が認められた。年代測定は、小枝状のものを利用し、樹種同定は2片について実施する。したがって、樹種同定は合計3点となる。

2住は方形を呈する竪穴住居址であり、供伴する土器の時期は7世紀末から8世紀前半とされ、住居の廃絶もその時期であろうと考えられている。サンプル1は、住居西側のカマドの覆土中から出土した炭化材である。

7住も一部未掘ではあるが方形を呈する竪穴住居址とされ、供伴する土器の時期から7世紀末～8世紀前半とされている。住居北側にはカマドと思われる焼土集中箇所が認められ、さらにその南西付近には「こもで石」と思われる石製品の散在とその中に焼土・炭化物の集中が認められている。サンプル2は、この焼土・炭化物の集中部から採取された炭化材の細片である。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する。試料中に含まれる炭素を酸化させて二酸化炭素とし、さらに精製ラインを用いて、二酸化炭素からアセチレンを合成する。β線計数装置の気体比例計数管で、 ^{14}C の崩壊数を計測する。測定が終了したアセチレンガスから再び二酸化炭素を作製し、安定同位体比測定用質量分析装置で試料中の $\delta^{13}\text{C}$ を測定する。

なお、炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

(2) 炭化材樹種同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下の木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3. 結 果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。サンプル1は 1220 ± 70 BP、サンプル2は 1780 ± 90 BPを示す。

また、校正した暦年代を表2に示す。暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を校正することである。暦年校正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年校正プログラムや暦年校正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年校正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差 σ の値をみると、サンプル1はcalAD694-885、サンプル2はcalAD127-376を示す。

(2) 炭化材樹種同定

樹種同定結果を表1に示す。サンプル1は、2片とも落葉広葉樹のカエデ属、サンプル2はイネ科に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・カエデ属 (Acer) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。細胞壁の厚さの異なる木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・イネ科 (Gramineae)

試料は、保存状態が悪く、薄く脆い。横断面で維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。

維管束の形態からイネ科と考えられるが、種・属等の同定には至らない。

4. 考 察

サンプル1で得られた年代は、校正暦年の範囲で見ると、土器から推定された年代範囲を包含している。このことは、2住の年代に関する発掘調査所見と調和している。一方、サンプル2が示す年代は、校正暦年でみると、発掘調査所見に対して500年ほど古い値となる。今後、カマドと思われる焼土集中箇所の炭化物なども含めて、複数の試料に対する年代測定実施が望まれる。

なお、2住のカマド覆土から出土した炭化材は、カマドから出土していることや、炭化していることから、カマドで使用された燃料材の一部の可能性もある。樹種同定結果から、カエデ属の木材が利用されていたことが推定される。カエデ属は、本地域の山野に普通に見られる落葉硬葉樹であり、周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。

一方、7住の炭化物は、住居北壁中央付近の壁際の床面上に見られた炭化物集中範囲から出土したものであり、炭化物集中範囲が形成される際に火を受けて炭化した可能性があるが、用途等の詳細は不明である。なお、イネ科には、イネ、ムギ類等の栽培植物やススキ、ヨシ等の、萱材として有用な種類が含まれる。

表1 放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果

試料名	遺構名	出土層位	種類	形状	樹種	測定年代 (同位体補正済) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	Code No.
サンプル1	2号住居址	カマドフク土	炭化材	小枝状	カエデ属	1,220 ± 70	-22.7	IAA-1008
			炭化材	破片状	カエデ属	—	—	—
サンプル2	7号住居址	床面	炭化材	細片状	イネ科	1,780 ± 90	-24.2	IAA-1009

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2 暦年較正結果

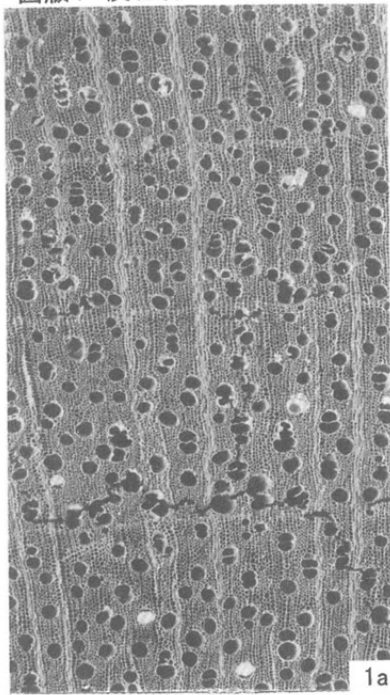
試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
		σ	2σ			
サンプル1	1,221 ± 71	σ	cal AD 694 — cal AD 702 cal AD 707 — cal AD 748 cal AD 765 — cal AD 885	cal BP 1,256 — 1,248 cal BP 1,243 — 1,202 cal BP 1,185 — 1,065	0.035 0.232 0.733	IAA-1008
		2σ	cal AD 665 — cal AD 903 cal AD 914 — cal AD 969	cal BP 1,285 — 1,047 cal BP 1,036 — 981	0.904 0.096	
サンプル2	1,789 ± 94	σ	cal AD 127 — cal AD 345 cal AD 373 — cal AD 376	cal BP 1,823 — 1,605 cal BP 1,577 — 1,574	0.987 0.013	IAA-1009
		2σ	cal AD 17 — cal AD 434 cal AD 494 — cal AD 505 cal AD 524 — cal AD 525	cal BP 1,933 — 1,516 cal BP 1,456 — 1,445 cal BP 1,426 — 1,425	0.995 0.004 0.001	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

〈引用文献〉

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト.
- 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 炭化材



1. カエデ属(サンプル1)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

写真図版



調査区遠景（西より） 写真奥には女鳥羽川が流れている



調査区遠景（南より） 写真上方は岡田地区



調査区全景（写真上方が東） 西に大門沢川、東に大門沢東川が流れる



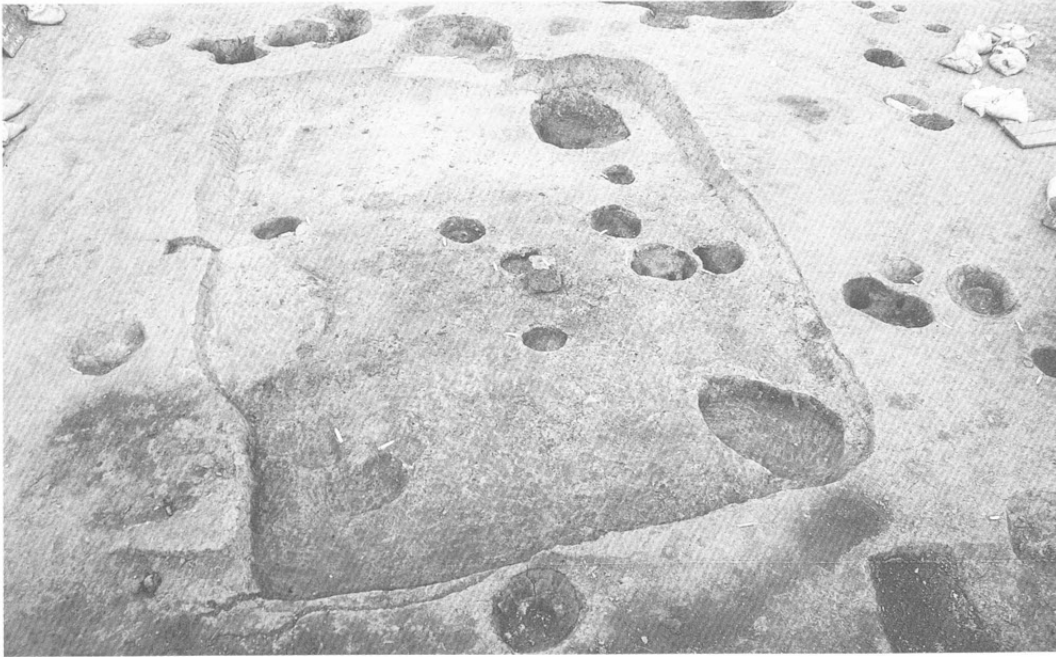
A区全景（写真上方が東）



B区全景（写真上方が北） 北西部にピット群が確認できる



C区全景（写真上方が北）



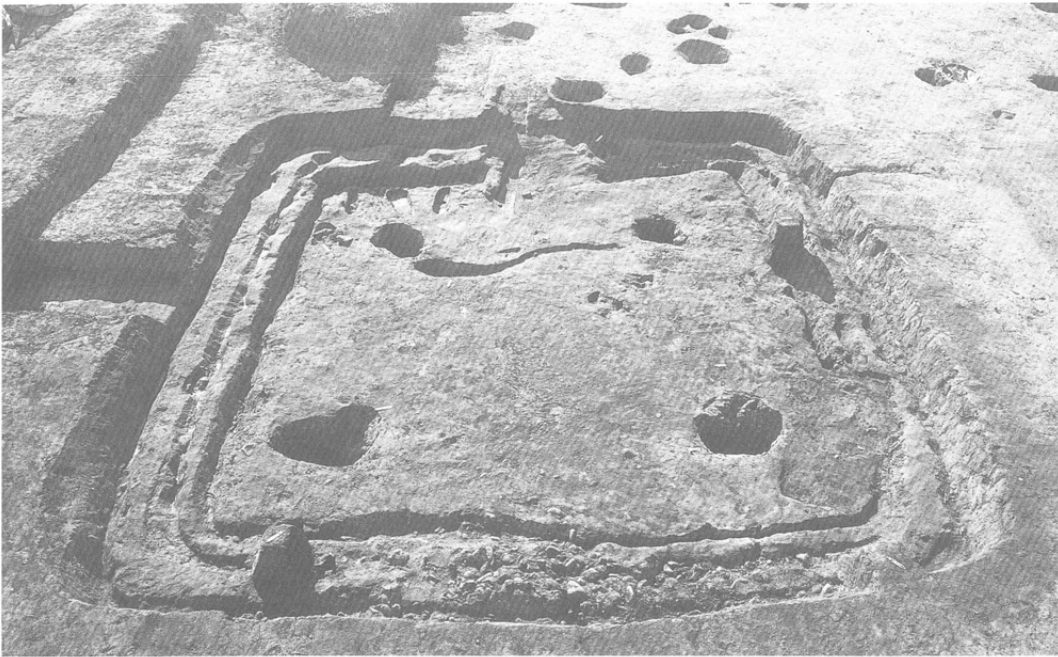
1住 完掘状況
(南から)



1住 カマド出土状況
(東から)



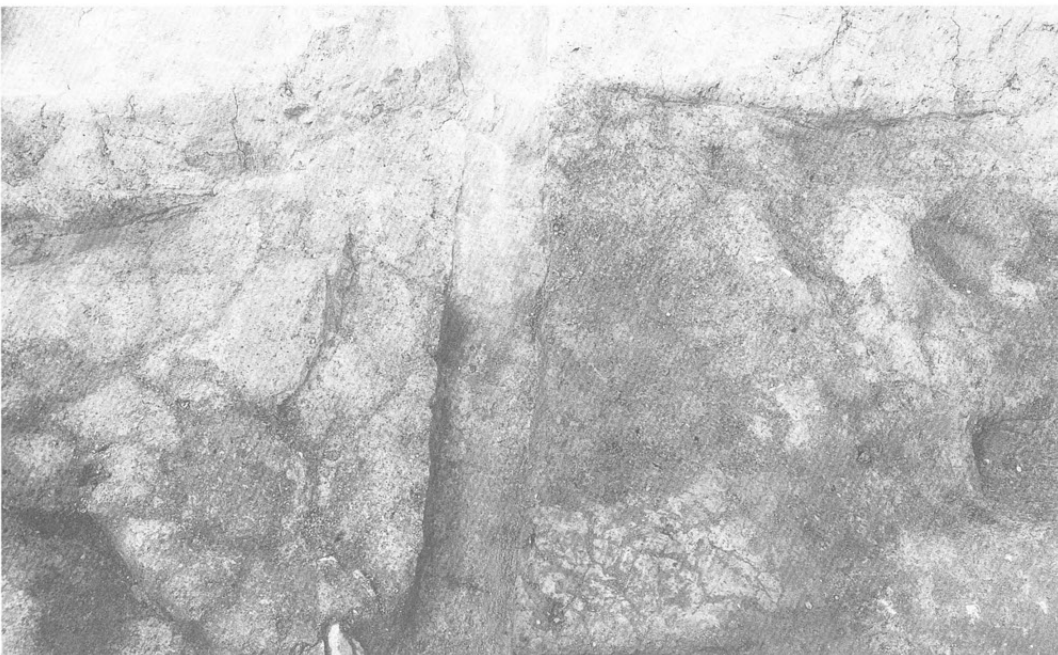
1住 遺物出土状況
(南から)



2住 完掘状況
(東から)



2住 貼床検出状況
(南から)



2住 カマド完掘状況
(東から)



旧2住
カマド完掘状況
(東から)



旧2住
溝状1完掘状況
(東から)



旧2住
南西部遺構完掘状況
(2住P2・3・4)
(東から)



3住 完掘状況
(東から)



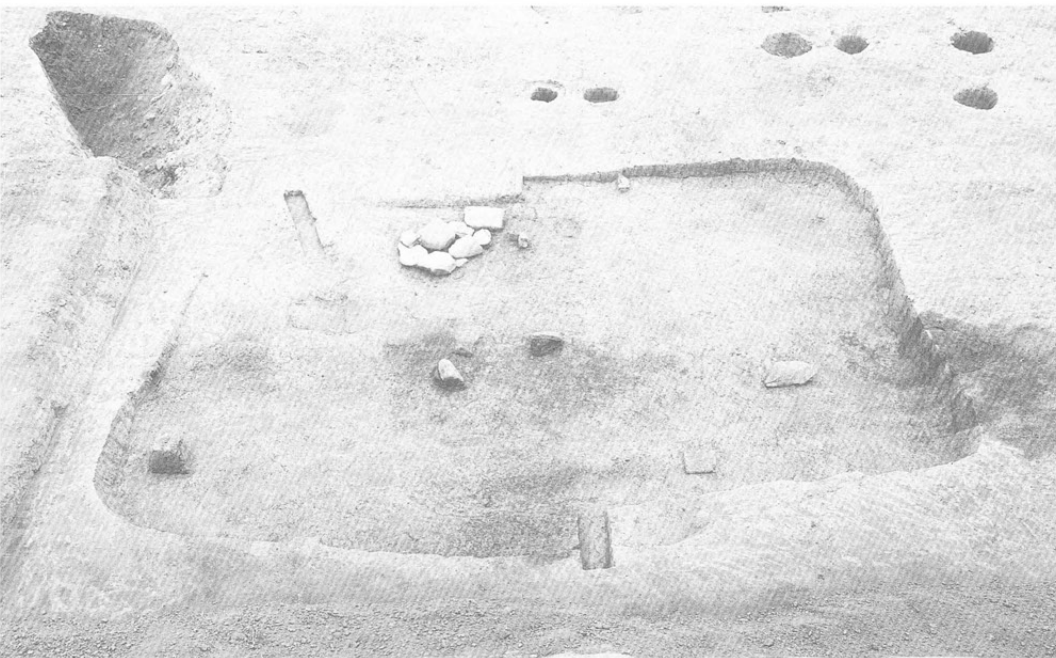
4住 北部溝検出状況
(西から)



4住 礫出土状況
(こもで石か?)
(西から)



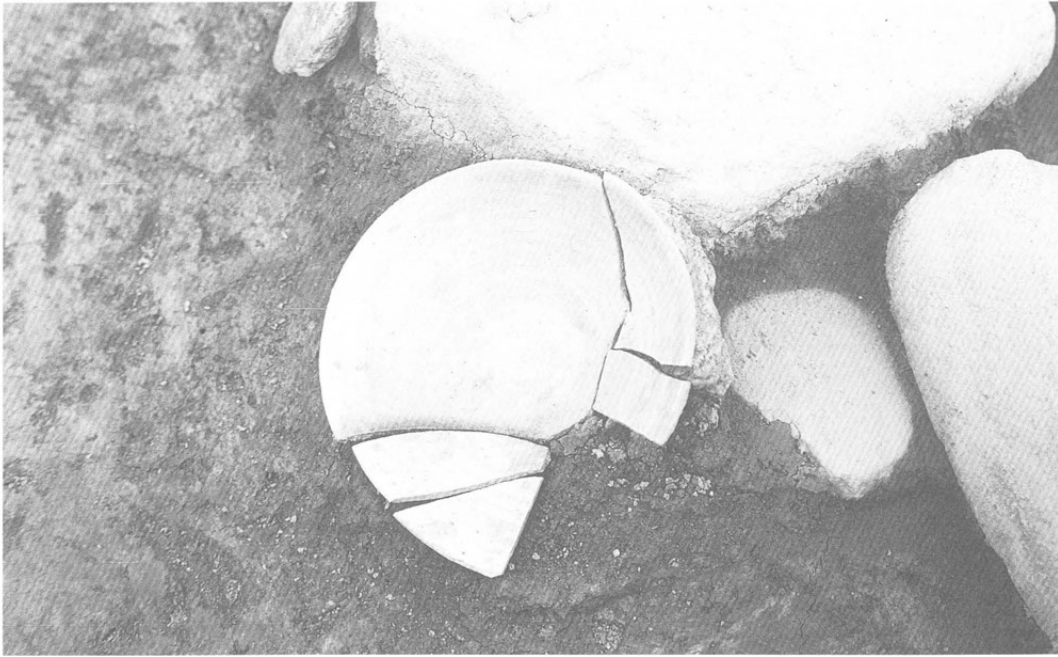
4住 礫出土状況近景
(西から)



5・6住
床面検出状況
(北から)



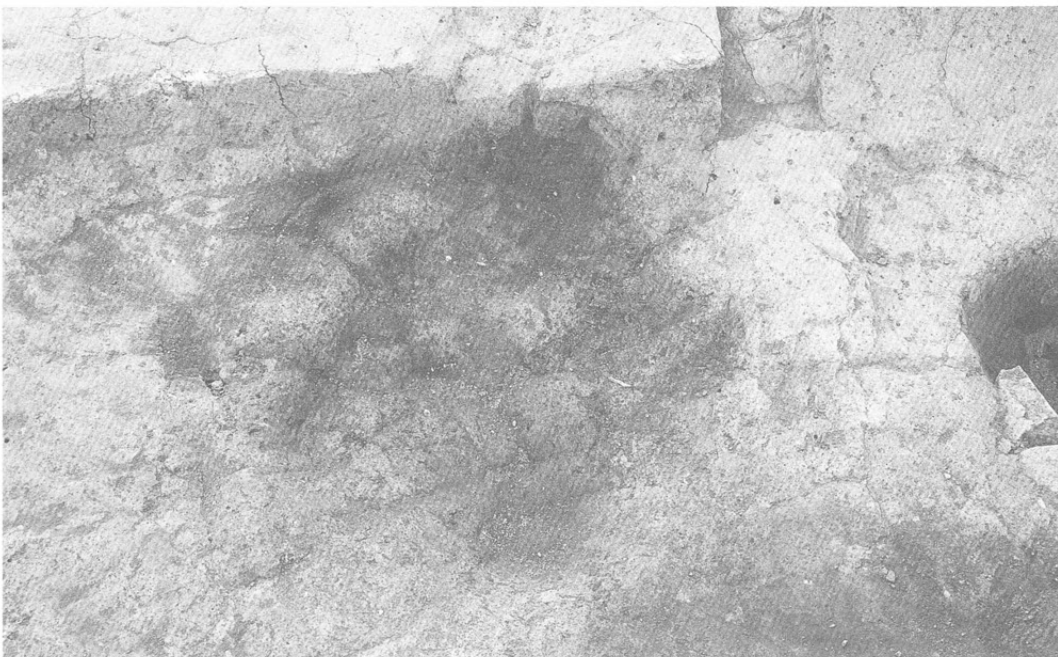
5住
南東部石礫・
遺物出土状況
(西から)



5 住
須恵器杯出土状況
(No.21)



7 住 完掘状況
(南から)



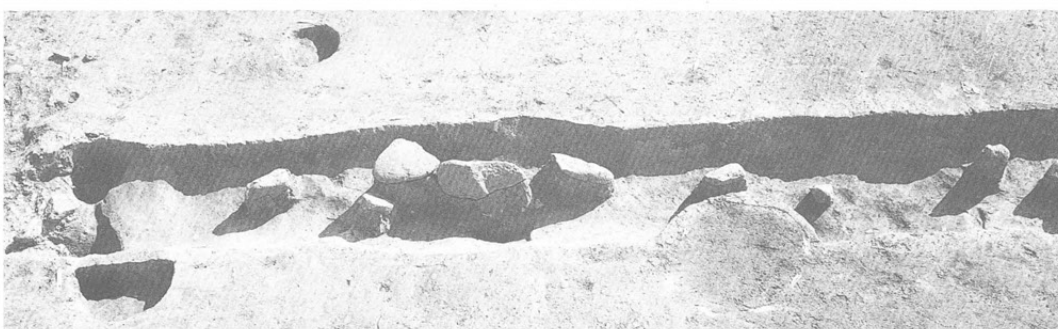
7 住
焼土集中箇所検出状況
(南から)



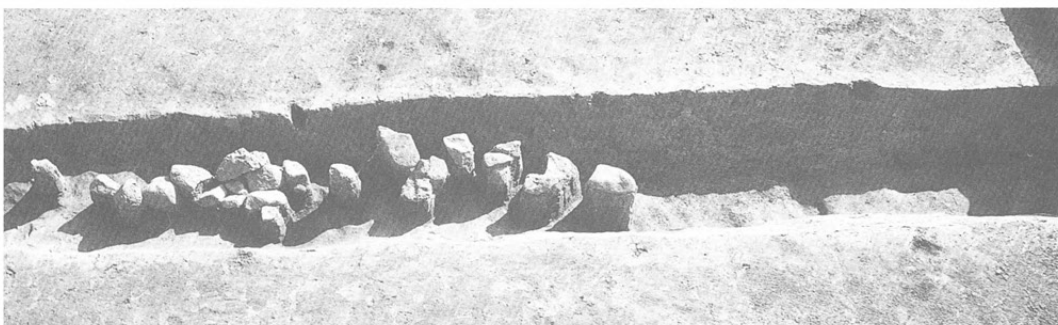
7住
礫・炭化物出土状況
(南から)



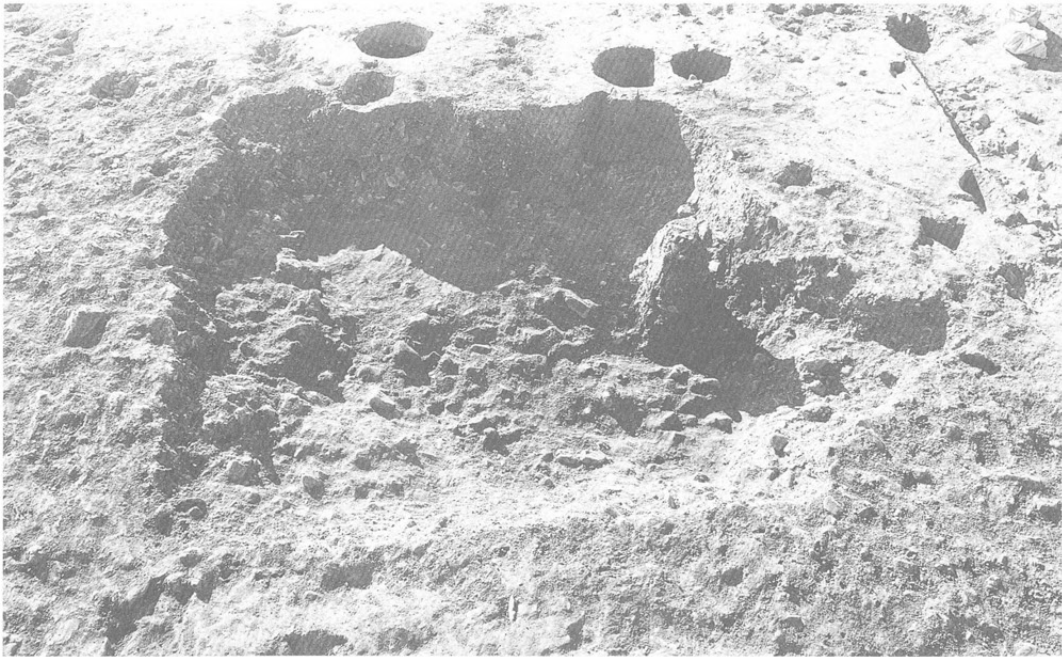
建1 完掘状況
(南から)



溝1 西部完掘状況
(南から)



溝1 東部完掘状況
(南から)



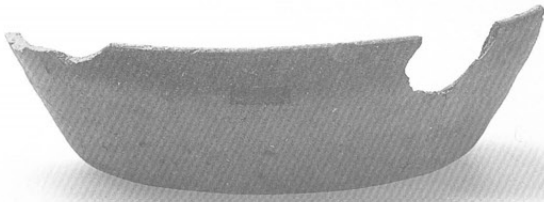
竖1 完掘状況
(東から)



土37 半割状況
(東から)



土37 完掘状況
(東から)
(左下は掘り過ぎ部分)

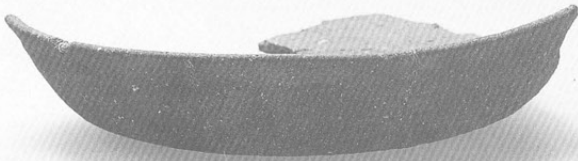


4



21

須惠器
杯



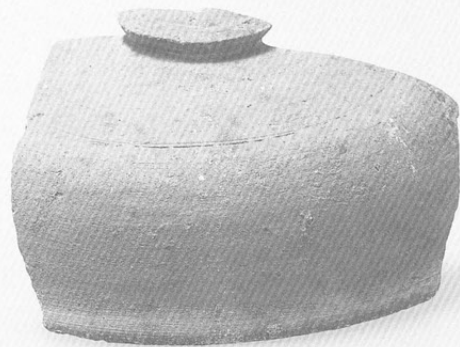
36



34



37



9

須惠器
蓋



3



30

土師器
甕

長野県松本市 元原遺跡 発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし もとはらいせき はくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 元原遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.189							
編著者名	直井雅尚、小山貴広、森 義直							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0874 長野県松本市大手3-8-13 TEL 0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2007(平成19)年3月23日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市 町 村	遺跡番号					
もと 元 原	ながのけんまつもとし 長野県松本市 まり 桐2丁目1135番	20202	146	36° 15' 12"	137° 58' 24"	2005.07.26 ~ 2005.11.25	1,770.8m ²	松本市中原 土地区画整理事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
元 原	集 落	古墳~ 奈良・平安	竪穴住居址	7	土器(縄文土器・土師器・須恵器)、石器 (石鏃・こもで石)	古墳時代末~奈良 時代初頭の集落址		
			竪穴状遺構	1				
			掘立柱建物址	1				
			溝	6				
			土坑	117				
			ピット	272				

松本市文化財調査報告 No.189

長野県松本市
元原遺跡

— 発掘調査報告書 —

発行日 平成19年3月23日

発行者 松本市教育委員会

〒390-0873 長野県松本市大手3-8-13

印刷 株式会社 プラルト

